日常の中の非日常

凰火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常の中の非日常

【Ｎコード】
Ｎ４３６２Ｗ

【作者名】
凰火

【あらすじ】
俺、山本恭介は目を覚ますと目の前に義妹が！？

第一話（前書き）

初投稿です
よろしくお願いいたします

第一話

7時３０分
目が覚めた、いや覚めないとヤバかった
目を開ければ女の子の顔が目の前にある
「何やってんの？」
俺こと山本恭介が少し眉間にシワを寄せて目の前の女の子に言った
「何って……目覚めのキス？」
俺は正直呆れていた
何故なら目の前の女の子は俺の義妹だ
妹ではなく義妹だ！！
名前は茜で俺の義妹であるが従妹でもある存在
「それは兄妹でするような事じゃない」
　ビシッ！！
「うぅ～　チョップはいたいよ～」
頭に手を乗せ上目遣いでこちらを見てくる茜
「別に血は直接繋がってないんだからいいじゃん～」「それでもダメだ」
「えぇ～」
文句を言う茜を部屋から追い出し学校に行くため制服を着てリビングに行くとすでに朝食を作り茜がいた

朝食を終えて茜と学校の前まで行くと
「よっお二人さん」
振り返るとそこには俺の友達である磯谷健太がいた
「健太か…まっ俺に話し掛ける物好きはお前だけだしな」
俺は学校ではあまり人と関わらない為友達が少ない

俺たち三人は同じ教室に入った

ちなみに俺と茜は同い年で俺の方がはやく産まれたので俺が兄で、
茜が妹だ
教室に入ってすぐ席についた
理由は先生がすでにいたからだ
授業も昼休みもいつものように茜や健太とすごした

放課後になり健太は部活、茜は呼び出しがあったので一人で帰る途中異様な気配を感じたのでそこに行くと「やはり居やがったか」
そこには今にも暴れそうな化け物がいた俺は化け物の姿を確認すると両手を横に出し『何もない空間から』右手には刀、左手には拳銃を取り出し化け物に向かって銃で射ち
接近して刀で一閃した
まだ息はあったが頭らしき部分を射つと消滅し何もいなかったみたいになった
「ふぅー」
一息入れると両手に持っている武器を放すと地面に吸い込まれるように消えた
「この力は人に知られたくないんだよな〜」
そうこの力は空間上にある自分の武器を取り出すと言うもので
ちなみに山本家の人間はこの力を持って産まれる
そして身体能力が人並み以上持っている
つまり茜もこの力を持っていて、身体能力がすごいのだ
俺は化け物、夜叉と呼ばれる化け物を見つけては殺している
それが山本家に産まれた者の定めと昔から両親に言われていたからだ
「さて帰るか」
俺は少し寄り道して帰るとすでに茜が帰っていた
「恭兄どうして私よりはやく出たのに遅かったの？」茜が首を傾けて聞いてきた「あぁ夜叉退治してきた」そうこたえると茜は自分がそこにいなかったのが残念だったのかそれを聞いて自分の部屋に行ってしまた

「今日の当番俺だっけ？」俺は呟きながら部屋に行き鞄を置いてから台所に行った
両親共に仕事（夜叉退治）であちこち行っているため俺と茜が順番に晩御飯を作っている
家事のほとんどが茜がやっているため晩御飯ぐらい俺がやろうとしたら茜が引かないためこうなった
「げっ材料残ってないじゃん」
俺は仕方ないので書き置きを残して買い物に出かけた

人物紹介（前書き）

登場人物紹介です

人物紹介

山本恭介（やまもと きょうすけ）

職業　高校生
年齢　十七歳
身長　１７５？

見た目は髪が黒のショーウトカットで一見普通の男子だか特殊な力を持っており夜叉と呼ばれる存在と戦っている

山本茜（やまもと あかね）

職業　高校生
年齢　十七歳
身長　１５０？

見た目は髪は黒くポニーテイルにしている恭介と同じ力を持っており夜叉と戦うことが可能
恭介との関係は義理の兄妹であり一緒に住んでいる

磯谷健太（いそがい けんた）

職業　高校生
年齢　十七歳
身長　１７０？

見た目は髪が黒くてオールバックにしている
恭介とは友達でクラスメイトである普通の人

第二話

俺は近くのスーパーまで買い物に来ていた
「えーと、これとこれとこれ」
食材をカゴに入れていき会計をすまして帰ろうとすると
「山本君？」
呼び止められた
しかも名前がわからない
彼女は困惑している俺に対して
「山本恭介君だよね？」
と再び聞いてきた
仕方なく頷くと彼女は突然笑顔になり
「買い物？茜ちゃんに頼まれたの？」
と聞いてきた
俺は結局名前を思い出すのを諦めて
「自分で材料の買い出しにきた、あと君は誰？」
それを聞いた彼女は少しガッカリして
「覚えてないの？クラスメイトなのに！？」
「ゴメン、俺あまり人の名前を覚えるの得意じゃないんだ」
彼女は呆れていた
「まぁいいわ、私の名前は神北真依、ちゃんと覚えなさいよ」
ちなみに彼女の見た目はちいさく多分１４０？だと思う髪は黒くツインテイルにしてある
世間一般で言うロリ体型である
「わかった、努力する」
俺は返事を適当にして
「覚えている自信はないけど」
と言い残して帰路についた彼女が呆れている顔をしていたことに俺はきがつかなかた

家に着くと茜があわてて出てきて
「大丈夫？何もなかった？」
「大丈夫、ただ神北真依ってやつに会っただけ」
「真依ちゃん？」
「多分茜が言っている人であってる茜のこと茜ちゃんって言ってたし」
「そうなの？」
「あぁ本当だ、それより少し待ってろ、晩御飯作るから」
そう言って台所に行きふと自分の姿をみると
「そういえば俺制服のままだ」
急いで自分の部屋に行き着替えてから再び台所に行き調理を開始した
味は茜より劣るがそこそこのできばえである

俺と茜は晩御飯を食べて少ししたら一緒に出かけた
もちろん夜叉を探しに
探している間は大抵雑談をしている
「恭兄そういえば私達が使っている力の名前って何だっけ？」
「ん？確か『架空武器庫』だったはず」
「変な名前だね～」
「別に覚えなくても力は出せるんだし覚えなくてもいいよ」
俺は苦笑いしていると夜叉の気配を感じてすぐさまそこに向かった
そして俺は目の前の夜叉の群れに驚いた
ざっと数えて十体以上はいる
「恭兄は六体で私が四体ね」
そう言って茜は両手に拳銃を装備した
「しょうがないな」
俺は鞘に入ったままの刀を取り出し夜叉の群れに突っ込んだ
（まず二匹）
居合い切りで二匹の夜叉を倒した

しかし右の夜叉までは倒しきれずそのまま攻撃されると思ったが
夜叉の頭に数発の弾丸が当たっていた
「悪い茜、助かった」
「恭兄、ちゃんとしてください」
俺は鞘で攻撃を防ぎつつ夜叉を切っていた
茜の援護もありあまり時間がかからず夜叉をすべて倒した

家に帰って風呂に入り、自分の部屋に行き扉に幾重にも鍵を掛けて
眠りについた

朝、目を覚ますと茜が目の前にいた
「何処から入った？」
あわてて起きて茜に聞いてみた
「何処って、扉からです♪」
そう言って扉を指さした
確かに鍵が解除（破壊）されていた
「鍵の数が三個から五個に増やしてるんだもん、解除するのに時間
かかったじゃん」
解除って…破壊されているのもありますけど…
俺は内心そう思いながら鍵の数を十個に増やすことを考えていた

第三話

俺は学校に登校中に考え事をしていた
もちろんそれは自室の扉の鍵をどうするかだ
単純に数を増やしても茜は解除（破壊）して部屋に入って来るからだ
「ん～どうしよう」
横に目を向ければ茜は笑顔だし…
よしこうなったら健太に相談でもするか、あまり頼りないけど…
「よっお二人さん」
いいタイミングに出てくるやつだと思いながら健太の方を見て茜に
聞こえないように小声で
「健太、実は相談がある」健太もあわせて小声で
「どうした？お前から相談とか珍しいな」
「それほど困ってるんだよ、茜のことで」
「お前シスコンに目覚めたか」
とりあえず一発ジョブ
「グブッ！？」
おぉこいつちゃんと踏ん張った
「殴らんでもいいやん、イテテ違うのか？」
「あたりまえだ、逆だ逆」「逆って茜ちゃんがブラコンってこと？」
そう言うと健太は茜を見たちなみに茜は俺たちより少し前を歩いて
いる
なので健太に放ったジョブは見えてないはず…
「ウソ～茜ちゃんが～」
そして疑っている目をこちらに向けた
まっ当然の反応だ
茜は人前ではそうゆう行動をとらないから当然と言えば当然だ
仕方ないので家での茜の行動を教えてやった
「ウソだ、茜ちゃんはそんな子やない」

「ウソじゃない、本当だ」「例えそれが本当なら、そんな羨ましいことが悩みだなんて贅沢だ！！」
ダメだこいつと思い、ため息をついて一発ジョブをいれて道を進んだ

結局何も思い付かないまま学校についた
茜のことは諦めて席についていると
「私のことちゃんと覚えてくれた？」
えぇ～と確か神北さん（だったけ？）が横にいた
「あぁ覚えているよ……神北さんだよね」
「その間はなに…まぁいいわ、で下の名前は？」
ん？名前は確か……
「真琴？」
「違う！！」
「じゃあ真弓？」
「惜しいけど違う！！」
本当は知ってるんだけど、反応が意外とおもしろくてふざけすぎた
「真依だよね、ちゃんと覚えてるよ」
「正解、ふざけてたの？」「まさか～」
視線を反らすと珍しいものを見るような視線がクラス全員（茜と健太を除く）からむけられていたのに気づいた

授業中も視線を感じたが無視して授業を聞いていた
「今来るのかよ」
呟きながら気配を探り多分グランドだろうと思った俺は先生に小声で
「仕事に行きます」
先生は少し驚いたがすぐに頷き扉を指さし
「気分が悪いなら保健室に行ってこい」
と言った
ちなみに先生たちは一部を除いて俺や茜の力を知っている
だらか授業中に夜叉が出ても行くことが可能

そして学校での戦闘は最初は保健室に行く
理由は生徒にバレないように変装するからだ
生徒にバレないようにする理由はいずれ話そう
「さて行くか」
俺は保健室を出て真っ先にグランドにむかった
体育の授業中だったのか生徒がちらほらいた
まだ夜叉に襲われてないがいつ襲いかかるかわからないので逃げて欲しいものだ（ん？今回は獣型か）
目の前にいる夜叉は狼のような姿をしていた

ここで夜叉について少し説明しよう
夜叉には三種類のタイプがある
人型、獣型、そして混合型
人型は名の通り人の形をした夜叉で一応武器らしき物を持っている
獣型は肉食動物の姿をしていていて人型より強い
混合型は簡単に言えば人型と獣型を混ぜた姿をしている
夜叉の中では混合型が一番強いがめったに出てこないまぁできれば一人の時に戦闘はしたくない相手だ
戦闘をすれば確実に深手を負うからだ

とりあえず右手に刀、左手に拳銃を装備して夜叉との戦闘を開始した

第四話（前書き）

今回から会話のところを変えています

第四話

俺は獣型の夜叉と戦っているが

恭介「周りのやつら邪魔〜」

と呟き周りにいる生徒に流れ弾がいかないように銃で攻撃していた

恭介「あ、弾切れた…」

俺は弾切れになった拳銃を捨てて左手でもう一つ刀を取り出した

俺が出せる殆どの武器は剣や刀など近距離武器で銃等の遠距離武器は拳銃しか出せない

そして茜の場合、銃や弓等の遠距離武器を出してたが近距離武器を出して戦ってるとこを見たことがない

俺は夜叉に攻撃していたがなかなか当たらず深手を負わせられなかった

恭介「仕方ないか」

俺は左手に持っている刀を捨てた

そして再び夜叉に攻撃した刀を一本にしたのは単純にその方が動きやすいからである

恭介「よし、あたる」

そして横に一閃すると避けきれなかったのか足の部分に傷を負っていた

恭介「これでトドメ」

俺は夜叉の頭に刀を突き刺した

夜叉との戦闘を終えて教室に戻ると

健太「恭介、戻るのがもうちょいはやかったら良かったのにな」

とニコニコしながら健太が話し掛けてきた

恭介「どうゆうこと？」

健太「さっきまでグランドでまた誰かが夜叉と戦ってたんだよ」

恭介「そうか…」

健太「制服がうちの学校のだったからここの生徒のはずなんだ」

恭介「そうなのか、うちの生徒に夜叉と戦えるやついたんだな」

まるで他人事のようにして話を流したがあきらかに自分のことだとわかった

恭介（変装は顔だけたしな）

服まで変えるとそれだけ時間がかかるからいつも顔だけにしている

恭介「ここから戦いが見えたのか？」

とりあえず健太に聞いてみた

健太「あぁ場所がグランドだったからバッチリ」

恭介「そうか」

健太「にしても誰だろな夜叉と戦っている二人」

健太「二人？一人じゃないのか」

健太「間違いね、男と女の二人だ、さっきは来てなかったがもう一人いる」

恭介「どうして性別まで解るんだ？」

健太「制服だよ制服、二人同時に出てくる時があるんだがその時、片方は男物、もう片方は女物を着ていた」

恭介「そうか…」

俺は次から気をつけようと思った

昼休み健太は戦いの時体育の授業だったクラスに行っていた

恭介「あいつ何がしたいんだろう」

茜「情報収集だと思いますよ、私たちの」

俺と茜は弁当（茜作）を食べながら話していた

神北「茜ちゃん一緒に食べていい？」

と神北さんが茜に話し掛けた

茜「真依ちゃん…恭兄いいよね？」

恭介「俺は別に構わないが」

神北「じゃあ兄妹水入らずのところお邪魔しま～す♪」

そうやって話していると昼休みは終わっていた俺と茜は会話を切り替えて別のことを話した

茜「そう言えば恭兄、買い物手伝って」

恭介「夕飯のか？それならいいぞ」

神北「なになに夕飯は茜ちゃんが作ってんの？」

恭介「前にも言った気がするが違うぞ神北さん」

神北「私のことは真依か真依ちゃんって呼んで」

恭介「……努力する」

正直俺は戸惑ってた

茜以外の女子と話すのは久し振りだし、下の名前で呼べと言うからだ

恭介「とりあえず俺も夕飯は作ったりしている」

茜「そうですよ真依ちゃん、恭兄も作ってくるんです」

真依「じゃあいつか食べに行っていいかな？」

恭介「それは構わないよな茜？」

茜「うん、大歓迎だよ」

そうして話していると昼休みは終わっていた

第五話（前書き）

感想・ご意見どしどし募集中

更新ペースはその日の気力しだいです

第五話

昼休みの後、健太に何してたか聞いてみたところ
茜の予想通りだった
夜叉を倒すことができるのは特殊な能力や力が必要なためそうゆう
存在が同じ学校にいるから見つけ出そうとする気もちはわからなく
はないが

恭介「まだ続けるのか？」

健太「ん？嫌なのか？」

恭介「正直嫌だ」

何をしているかと言うと聞き込みによる情報収集

恭介「聞くだけ無駄だと俺は思うぞ、てか茜と買い物に行く約束が
あるから俺は帰るぞ」

健太「え、ちょい待ってよもう少し一緒にいてくれてもいいじゃん」

恭介「無理、正直周りからの視線が痛い、そしてお前部活あるだろ」

健太「そうだった、じゃあ部活行ってくる」

そう言って健太は部活に行ってしまった

恭介「俺は帰るか」

鞄を教室まで取りに行き学校を出た

茜は先に帰っているため今日も俺一人の下校となった通学路には横断歩道がいくつかあって運が悪い時は全部の信号機に引っ掛かるのだが今回はあまり引っ掛からずに進んでた

最後の横断歩道を渡っている途中だった車が目の前の女性にむかって走ってきた

俺はあわてて走り女性を抱え歩道に飛び込んで車を回避した

恭介「大丈夫ですか？」

俺は立ち上がり手を差し出したが突然の出来事に驚いていた

？？？「ありがとうございます、おかげで助かりました」

彼女はあわてて手をとり立ち上がりながら笑顔で応えたよく見ると同じ学校の制服だったが俺は気にせず

恭介「それじゃ、俺はこれで」

？？？「あっ」

彼女が何か言う前に俺はその場から立ち去った

家に帰ると少し汚れた制服について茜が聞いてきたが軽く流した

茜と買い物に行き（もちろん荷物持ち）夕飯を食べてから夜叉を探したが今日は空振りだった

眠りにつこうとした時、茜が来たがもちろん追い返した

朝、いつものことだが茜の襲撃に遭った（鍵は破壊されていた）

恭介「はぁ〜」

茜「ため息したら幸せが逃げるよ恭兄」

恭介「誰のせいだと思ってんだ」

俺は茜を見ながら言ってみたがとうの本人は、何のこと？と言いたいのか首を傾けた俺は諦めて歩いていた

健太「おーい、お二人さーん」

恭介「どうした？昨日の続きなら俺はしないぞ」

茜「昨日の続き？恭兄何かしてたの？」

恭介「俺じゃなくて、コイツが」

健太「変なことはしてないから、勘違いしないでよ茜ちゃん」

茜「そうですか…」

茜はそう言って少し前を歩き始めた

健太「前から思ってたけど、茜ちゃん俺に対して冷たくない？」

恭介「何？今頃きづいたのか、茜はお前をある意味嫌ってるぞ」

健太「マジか！いや嘘だと言ってくれ」

恭介「なら試してみるか？おーい、茜」

茜「どうしたの？恭兄？」

茜は笑顔で俺の所に来た

恭介「いや、戸締りちゃんとしたっけ？と思って」

茜「恭兄、ちゃんと戸締りは私がしたから安心して」

そして笑顔のまま再び前を歩き始めた

そして少し間を置いて

健太「ねぇ茜ちゃん」

茜「なんでしょう？」

茜はその場で顔だけむけて返事をした

健太「いや～今日いつもより機嫌がいいから、何かあったのかな～と思って」

茜「別に何もありませんよ」

そして茜は再び前を見て歩き始めた

健太「この温度差…ひどくない？」

恭介「お前が嫌われてる証拠だ」

健太はガックリと肩を落とし歩いていた

教室に行くとある話題でみんな騒いでた
俺は席に着き外を眺めてたら
真依「恭介！ビッグニュースだよ！」
恭介「どうした？てか名前呼び捨てかよ…」
真依「そんなことどうでもいいの」
うわ、どうでもいいのかよ
真依「そんなことよりも転校生がうちのクラスに来るんだって」
恭介「転校生？俺にとってはどうでもいい」
真依「えぇ～二人来るんだよ～転校生」
恭介「二人？珍しいがたまたま重なっただけだろ」
ちなみにうちのクラスは他のクラスより人数が少ない為、優先的に
転校生はうちのクラスに来る
真依「そうかもしんないけど～、もう少し興味ぐらい持とうよ～」
真依が残念そうに言って、上目遣いでこちらを見てきた
恭介「すまんな、もともと俺は友達とかあまり作らないんだ」
真依「そうなの？確かに磯谷君と茜ちゃんとしか話してるとこしか

見ないしね、何で？」

恭介「そこには出来れば触れて欲しくないんだ、だから言えない」

俺は苦虫を潰す気分だったそれに気づいたのか真依はそれ以上何も言わなかった

第六話

教室の扉が開き先生が入って来た
生徒は皆あわてて席に座り教室は静まりかえった

先生「はーい、皆さんすでに知っている人がいるかもしれませんが転校生が二人うちのクラスに来ます」

健太「先生～転校生は女ですか？男ですか？それとも両方ですか？」

先生「よろこべ磯谷、転校生は二人とも女だ」

それを聞いたクラスの人たちは（俺と茜を除く）騒ぎだした（主に男子）

先生「お前らうるさい！静かにしろ！」

先生が一喝すると騒いでた生徒たちは黙り込んだ

先生「よし、静かになったお前ら入って来ていいぞ」

そして扉が開き二人の女子が入って来た

西条「初めまして、西条琴音（さいじょうことね）と言います」

彼女は見た目、身長１６０？ぐらいで髪は黒に少し茶色が混ざっていてロングのストレートである

神崎「私は神崎美紅（かんざきみく）だよ～みんなよろしくね～」

彼女は身長１３０？あるかないかで髪は黒のショートだが頭の天辺にアホ毛がある

先生「じゃあ西条は神北の隣で神崎は…山本兄の後ろが空いてるなそこに座れ」

二人は指示された通りに席に座った

神崎「山本兄君？よろしくね」

恭介「俺の名前は山本恭介だ、よろしくな神崎さん」

神崎「えぇ～私のことは美紅って呼んで～私も恭介君って呼ぶから～」

そこには真依と一緒かよ！と思いつつ

恭介「……わかった」

美紅「よろしくね♪恭介君」

彼女は笑顔になっていた

気のせいか頭のアホ毛がピコピコ跳ねているように見えた

休み時間になると美紅と西条さんは質問攻めをされていた

しかし西条さんは俺の所まで来た

西条「昨日はありがとうございました」

恭介「え？」

突然お礼を言われた…

西条「昨日車に轢かれそうだった私を助けてくれましたよね？」

恭介「あぁ昨日の、別にお礼を言わなくてもいいのに」

俺は苦笑いをしていた

周りにいるクラスのやつらは驚いているのかかたまっていた

西条「えーと、山本兄君？でしたっけ？本当に感謝しているんです！是非とも恩返しさせてください！」

恭介「西条さん…まず最初に俺の名前は山本兄じゃなくて山本恭介だから、そしてお礼ならいらないから」

西条「すいません山本君、ですがそうゆう訳には参りません、何か恩返しさせてください」

恭介「……わかったから頭上げて、そして立ち上がって」

目の前で女の子に土下座されて断われますか？

俺は無理です、てか周りからの視線が痛い

西条「ではさっそく恩返しを…」

恭介「後でいいから、てか後日改めてしてもらうからいまはいいよ」

西条「そうですか…」

彼女は少し残念そうにしていたが

西条「わかりました、後日また改めて恩返しさせてもらいます」

そう言って彼女は席に戻った

残ったクラスの人たちはしぶしぶ席に戻った

授業中昨日に続いて夜叉の気配がした

俺は先生に了解を得て教室を出た瞬間走った

第六話（後書き）

皆さんここまで読んでくれて非常にありがとうございます

まだまだ書き続けますが更新のペースがばらつくかもしれませんが

これからもよろしくお願いいたします

第七話

俺はグラウンドへむかっていた（変装済）
そしてある違和感に気づいていた
それは質の違う二つの気配が少し離れた位置から互いにむかって近づいていたからだ

夜叉が複数いるときは例外を除いて同じタイプしか集まらないからだ
例外というのは混合型になろうとしている人型と獣型だ

とにかく俺は急いだ
そして…

恭介「最悪だ」

グラウンドにいたのは人型と獣型だった
幸いまだ混合型になっていない

恭介「はやく、引き離さないとヤバイ」

俺は拳銃を取り出し近づきながら人型にむかって全弾撃ち放った
俺の存在に気づいた夜叉たちは一瞬距離を置いたがすぐに互いにむかって近づき始めた

恭介「くそ！間に合うか」

俺は銃を捨て、二本刀を取り出し夜叉たちに投げた
しかし刀がとどく前に『混ざり』始めた

恭介「間に合わなかったか…」

俺は覚悟を決めて刀を取り出した
投げた刀はあまり効き目がなかったのか刀は抜け落ちた
そして目の前の混合型はベースが獣型なのか見た目は獣に近いが背中に武器らしき物を持った手が生えていた

恭介「混合型は見た目で判断しない方がいいんだったよな」

俺は刀を構えた
まずは相手を観察して行動パターンを見つける
夜叉が動きだしたが、はやい！
咄嗟に後ろに跳んだが少し腕を掠めた
すぐさま刀を横に薙ぎ払った

恭介「え？ウソだろ」

薙ぎ払った刀は防がれていた
夜叉の背中に生えている手が持っている武器で

恭介「これは本気でヤバイかも…」

俺は後ろに下がり周りに生徒がいないのを確認した
そして俺は拳銃を取り出し校舎の壁にむかって二発撃った
茜に援護をお願いする時の合図をしておいた

恭介「茜が気づくことを祈っておくか」

だが実際これは賭けに等しかった
理由は校内にいる生徒が騒いでたら銃声は聞こえても壁に着弾した

音が聞こえないかもしれないからだ

恭介「とりあえず今は一人でなんとかしないとな」

俺は残りの弾を撃ちながら夜叉に接近して刀を縦に振った
しかし夜叉は横に跳び避けた

恭介「ん？なんで武器で防がなかったんだ？」

俺は銃を捨て、代わりに刀を取り出した

恭介「試してみるか」

夜叉に接近して右手を横に振り少し遅れて左手を縦に振った
しかし俺の予想は外れていた
二つ共武器で防がれた
そして夜叉は前足の片方を横に振り攻撃してきた
咄嗟に後ろに跳んだが間に合わず、攻撃を横腹に受けて少し飛ばされた

恭介「イッテ～」

傷口からは血が出ていた
しかし傷口は意外と浅かった
これならまだいけると思い刀を一本夜叉に投げて接近した
そして幾重にも攻防を繰り返したが徐々に追い詰められていた

恭介「くそ！これならどうだ！」

俺は一瞬で夜叉の後ろに回った

そして夜叉が振り向く前に一閃した

恭介「まだだ！」

そしてひたすら全力で斬る夜叉の体が徐々に切り刻まれていった

手が足が胴体がどんどん斬られていきとうとう夜叉は消滅した

恭介「はぁはぁはぁ、やっと終わったか」

緊張の糸が切れたのか地面に崩れ落ちたそして全身に痛みが走ったよく見ると体は血だらけで傷も多かった

茜「恭兄大丈夫！？」

顔を隠した茜が慌てた様子で近くにいた

恭介「茜か……後は頼んだ」

茜「後は頼んだって、恭兄！？」

俺は意識を手放して倒れ込んだ

第八話

目が覚めると、まず天井が見えた
そして薬品の匂いが漂っていた

恭介「ここはどこだ？保健室？」

俺は体を起こすと少し痛みが走った
そして体には包帯が巻かれてた

茜「恭兄！」

茜が閉まってたカーテンを開けて出てきた

恭介「茜か、どうした？」

茜「どうした？じゃないですよ恭兄！助けに行ったら傷だらけで、しかも倒れたと思ったら気絶しているからかなり心配したんですよ！」

恭介「そうか…悪かったな心配させて…」

茜「いえ…合図に遅れて気づいた私が悪いんです」

恭介「遅れて？じゃあどうやって気づいたんだ？」

茜「磯谷君が騒いでたんです、あいつこっちに銃で二発撃ってきたぞって」

恭介「やっぱり窓際は騒がしかったのか」

茜「はい、そのせいで合図に気づきませんでした」

茜は悔やんでるのか険しい顔をした

恭介「茜あまり自分を責めるなよ、別に茜が悪いわけではない」

茜「ですが！」

恭介「茜、俺は気にしてないし、茜を責めるつもりもない」

茜「わかりました」

茜はこれ以上何も言わなかった

恭介「そう言えば俺の制服は？」

茜「それならここにあります」

そう言って茜は真新しい制服を取り出した

茜「恭兄が着ていたのはボロボロだったから、保健の先生が新しく用意してくれました」

恭介「保健室に制服の代えがあるのかよ…」

そう呟きながら渡された制服を着た

恭介「よし、教室に戻るか」

茜「今は授業中ですからまだダメです」

恭介「そうか…ところで今何限目？」

茜「確か四限目です」

確か俺が教室を出たのは一限目だったはず…

恭介「そうか、なら昼休みに教室に戻ろう」

茜「はい、わかりました」

何故か茜は笑顔である

背筋に寒気が走った

恭介「茜…変な気起こすなよ」

茜「恭兄～何のことかな～」

そう言って茜は保健室の鍵を閉めた

そして振り返ってこっちにゆっくりと歩き始めた

恭介「茜何をしている？」

茜「恭兄が逃げないように鍵を掛けたの～」

恭介「はぁ…」

これはダメだ、奥の手を使おう

恭介「茜どちらか選べ、一つ目、このまま俺を襲って俺に嫌われる、二つ目、俺を襲うのを諦めて一日だけ俺と一緒に寝るの、どっちがいい？」

すると茜の動きが止まりプルプル震えて

茜「恭兄ごめんなさい、もう悪いことはしないから今日一緒に寝てください」

すごい勢いで土下座したかと思うと顔を上げて言ってきた

茜…そんなに一緒に寝たいのか

恭介「今日一日だけだからな」

茜「毎日は？」

恭介「ダメ！」

茜「恭兄のけち～」

恭介「はぁ～仕方ない、今日俺が寝ている間何もしなかったら…三日一緒に寝てやる」

茜「毎日は？」

恭介「茜が隠し撮りした俺の写真を全部燃やしすのと俺が寝ている間に襲わないと約束できるなら考えてやる」

茜「恭兄の鬼！」

恭介「やっぱりあるのか隠し撮りした写真…」

まさかと思ったが流石に驚いた

そんなやりとりをしているとチャイムが鳴り俺と茜は教室に戻った

教室に戻って弁当を茜と食べていると

美紅「恭介君もう大丈夫なの？」

恭介「ん？あぁ大丈夫だぞ」

美紅「なら一緒にお昼食べていい？」

恭介「俺は構わないけど…茜いいか？」

茜「はい、いいですよ」

そしてさらに

西条「私もご一緒にいいですか？」

真依「私も一緒にいい？」

健太「俺もいいか？」

恭介「茜…」

茜「わかってます、みなさん許可します」

そして俺たちは食べ始めた
恭介「そう言えば西条さん昨日会ったとき制服着てたよね？なんで？」
西条「それは…秘密です」
健太「なになに俺にも教えてくれよ～」
恭介「お前には関係ない」
健太「茜ちゃ～ん恭介が冷たい～」
茜「恭兄いくら磯谷君がうざくて面倒だからってちゃんとしないとダメですよ」
健太「何気に茜ちゃん…痛いことを言う…」
美紅「気になってたけど二人は兄妹？」
西条「それ私気になってました」
恭介「ん？茜と俺は義兄妹だが」
茜「そして従兄妹でもあるんです」
美紅「なんかすごいね恭介君と茜ちゃんの関係…」
西条「はい、私もそう思いました」
茜「でも一緒に住むのは私にとっていいことです」

恭介「何故か背筋に寒気が…」

そうして昼休みはすぎていった

第九話

放課後、健太が珍しく考え事をしていた

恭介「どうした健太？お前にしては珍しいな」

健太「恭介…いやそれがさおかしいんだよ」

恭介「なにが？」

健太「今日も顔を隠したやつが夜叉と戦ったんだけど…あいつ制服とかボロボロだったのに生徒全員調べたが…」

恭介「いなかったと？」

健太「そう…制服ならともかく身体中傷だらけだったのに見つからないんだよ、そうゆうやつが…」

それはそうだろと思っていた

何故なら俺は傷が痛まないように極力自分の席から動かなかった

そのおかげでみんなから不信に思われることはなかった

健太「気絶するくらい重症だったのに…」

恭介「そうか…」

なんだか必死になって俺を探してる健太を見ると正体を教えたくなってくる…

恭介「そう言えば何でそんなに必死になって探しているんだ？」
健太「決まってるだろ、あいつの知り合いになったら女子からモテそうだからだ」
前言撤回、こいつには絶対教えたくない
恭介「……」
健太「恭介どうした？そんな汚いものを見るような目して」
恭介「実際、目の前に心が腐ってるやつが……いやなんでもない、俺帰るから」
健太「心が腐ってるって…ちょっ！？待てや恭介！！」
俺は無視して教室を出た
校門まで行くと茜がいた
茜「恭兄一緒に帰ろ」
そうして茜と一緒に帰った
茜「恭兄…体大丈夫？」
帰り道の途中茜は学校の生徒がいないのを確認して聞いてきた
恭介「ん？横腹の傷以外ならもうほとんど痛みはないぞ」
茜「そうですか…よかった…」

恭介「なにが？」

茜「今日一緒に寝る時に抱きつけると思って…」

恭介「できればしないでください」

思わず敬語になってしまった…

茜「えぇ～、でも抱きつくからいいもん」

あ、こりゃ無理だと悟った俺は何も言わなかった

そうして夕食は怪我をしているからと茜が作った

そして夜の夜叉探しは茜に止められたが俺も一緒に行った

茜「恭兄…無理だけはしないでよ」

恭介「大丈夫、さすがに混合型は出ないだろ、それに茜は夜叉の気配わからないだろ」

茜「うっ、そうだけど…」

恭介「お、いたぞ」

俺は夜叉の気配がしたので話を切り上げて気配がする方にむかったが…

恭介「気配が…消えた…」

茜「恭兄本当！？」

恭介「あぁ、間違いない…消えた」

俺はあわてて気配が消えた所に行った

そこには戦闘があったのか道路や壁に何かが燃えた跡や所々地面にヒビがあった

恭介「なんだ…これ」

ただ驚くしかなかった

見ている光景もだが夜叉と戦えるのが俺と茜以外にもいたとゆう事実に驚いていたその後も夜叉を探したが見つからず家に戻っていた

俺はあの戦闘の跡のことで考え込んでいた

恭介「どう考えてもあの跡は……」

茜「恭兄一緒に寝よー」

茜がドアを勢い良く開けて入ってきた

恭介「……はぁわかった」

俺は考えることを諦めて寝ようとしたが

恭介「……痛い」

茜「あ、ごめん恭兄」

茜が抱きついた拍子に横腹の傷に手が当たっていた

そうして抱きつくのを諦めたのか、俺腕を枕にして寝ていた

恭介「……俺も寝よ」

そうして今度こそ俺は寝た

第十話（前書き）

誰をメインヒロインにするか悩んでいます

第十話

朝、目が覚めたが…

恭介「…痛い、重い」

俺は自分の体の上に乗っている人物に声を掛けた

恭介「茜…痛いからどいてくれ、あと何で上に乗っている」

茜「ふぁ～恭兄～おはよ～」

恭介「あぁおはよう、じゃあなくて痛いからはやくどいてくれ」

茜「あ、ごめん恭兄」

そう言って茜は俺の上から降りてベッドの横に立った

恭介「で、何で俺の上に乗っていたんだ」

茜「恭兄を体で感じたかったのと上に乗れば恭兄が私に……」

恭介「欲情はしないし、襲わない」

茜「欲情ぐらいしてくれてもいいじゃん…」

茜はショックだったのか少し落ち込んでいた

恭介「茜…まるで俺に襲ってもらいたいような発言はするな」

茜「ような、じゃあなくて襲ってもらいたいの恭兄に」

恭介「茜…もっと自分を大事にしろ…」

そうして俺たちは制服に着替え（茜は自分の部屋で）朝食を食べて学校にむかった

いつものように途中で健太と合流して学校についた
そして教室に行き席につくと

美紅「おはよう恭介君」

恭介「…おはよう美紅」

美紅が挨拶してきたので返事をすると…

美紅「後で話があるから休み時間に屋上に来て」

恭介「……わかった」

美紅が小声で話したので驚いていた

休み時間、美紅に言われた通り屋上に行くと美紅はいないのか辺りには高いフェンスしかなかった

美紅「思ったよりはやかったね」

振り返るとそこには美紅がいた

恭介「で、話ってなんだ？」

美紅「単刀直入に言うけど、恭介君昨日グラウンドで戦ってたでしょ？」

恭介「何のこと？俺その時保健室にいたけど」

美紅「他の人は騙せても私は騙せないよ、教室を出る前にはしなかった血と薬品のにおいが教室に戻って来たときにはしてたから」

恭介「で、もし仮に俺が昨日戦っていたやつだったらどうするの？」

美紅「一緒に戦えるようにお願いする…」

恭介「何で？」

美紅「その前にどうなの？昨日戦ってたのは恭介君？」

恭介「……あぁそうだよ昨日戦っていたのは俺だ」

美紅「どうしてみんなには隠しているの？」

恭介「それは言えない」

美紅「そう…なら無理に聞かないよ」

恭介「それは助かる、で何で一緒に戦いたいんだ？」

美紅「それは……」

美紅は顔を少し赤らめて下をむいた

美紅「そう特訓だよ特訓、私の特訓！」

美紅は顔を上げて言って来た

恭介「特訓？美紅には必要ないだろ、昨日の夜二匹夜叉倒しだろ」

昨日茜と探している時に感じた気配は二つだった
つまり二匹夜叉はいたことになる

美紅「……何でわかったの昨日の夜こと」

恭介「俺はある程度気配で夜叉の位置と数がわかる、そしてこの町には俺を入れて二人しか夜叉倒せるのはいない」

美紅「なるほど…それでわかったの」

恭介「で本当の狙いは」

俺は問い詰めようとしたが時間なのかチャイムが鳴った

美紅「教室に戻ろうか、授業が始まるよ」

恭介「あぁわかった」

俺と美紅は教室に戻った
そして……

恭介「先生、保健室に行って来ます」

先生との距離が遠かったので大声で言うとあっさり許可をもらった
美紅が一緒に行こうとしたが止めて、茜に目で合図した
すると茜が

茜「先生、私も保健室に行って来ます」

と行ってついてきた

場所はグラウンドと屋上だったので茜は屋上に行かせた
俺はグラウンドにむかって走っていた

第十一話

恭介「結構いるなー」

グラウンドに着いた俺の第一声はこれだった
いくら気配だけで夜叉の数がわかると言っても限界がある
俺は五匹（五体）までは数がわかるけど
それより数が多いとわからなくなってしまう

俺は右手に拳銃を装備して目で夜叉の数を確認した

恭介「えーと、十二体かよ…」

目の前にいる夜叉は人型だったけど
正直きついです
一人で十二体は…

恭介「でも、ヤルしかないか…」

俺は銃を構えて一体の夜叉の頭に数発撃ち込んだ
すると周りにいた夜叉が俺の存在に気づき襲い掛かってきた
俺は残りの弾で二体倒して銃を捨てた

恭介「残り九体か…いけるか？」

俺は刀を取り出して接近した

恭介「まずは二体…イテッ」

横に一閃したが横腹の傷から痛みがあった
そして一体は胴体から上を斬り落としたが、もう一体はうまく斬りれてなくてまだ動いてた

恭介「茜の援護は…期待できないだろうな」

俺は屋上を見たが茜は俺より多くの夜叉（人型？）と戦っていた

恭介「残り八体…」

左手で横腹を押さえて一息入れて再び夜叉に接近したそして刀で夜叉を斬る度に横腹が痛んだ
そして痛みで動きが鈍くなり

恭介「あぶね！」

咄嗟に刀で攻撃を防いだが力がうまく入らず押し負けていた
そして俺の動きが止まったのをいいことに他の夜叉が攻撃してきた

恭介「ウッうぅ」

横からの攻撃は何とか回避できたが背中に痛みが走った
どうやら背後からの攻撃は避けきれなかったらしい
俺は一体の首を斬り一旦夜叉と距離を置いた横腹から激しい痛みや斬られた背中からの痛みで力がうまく入らなかった

恭介「はぁはぁ、まだ動けるはずだ」

目の前にはまだ四体の夜叉がいた

そのうちの一体がこっちにむかって来て、攻撃をしてきた
咄嗟に刀で攻撃を防ぐが力が入らず吹っ飛ばされた
そして俺が立ち上がる前に夜叉が攻撃をしてきた
夜叉の武器は刀に似ていた今その攻撃にあたった確実に死が待っているが避けれない、体が反応しきれてなかった
俺は死を覚悟して目を瞑って

恭介「茜…ごめん…」

そう呟いた
が痛みがなかった
俺は目を開けたそして目の前で夜叉が燃えていた

???「恭介君無事!?」

恭介「え?」

誰だあれ?そう思ってしまった
見たことがないマスクを被った小柄な女性がいた

恭介「もしかして美紅?」

美紅「わっ正解、何でわかったの?」

恭介「いやだって、茜は屋上で戦ってるし、他に力が使えて、ち…」

小さい人と言おうとしたが顔の横に火の玉が飛んで来たので言えなかった

美紅「何か言いましたか?」

恭介「何も言ってません」

美紅は笑顔だが…

怖い、そして黒いオーラ的なものが見える

美紅「とりあえずこいつら倒そう」

そうして美紅は手を前に出して

美紅「炎よ我が敵を焼き払え、ファイヤー」

術文なのかそれを言った瞬間、赤い円形の陣が三つ出てきてさっき俺に放った火の玉よりデカイのがそれぞれの陣から出てきて夜叉にそれぞれあたると夜叉が勢いよく燃えた

恭介「すげー…」

これ以外言葉が出なかった一瞬にして三体の夜叉を倒したからだ

恭介「イッテテ…」

保健室に戻って体を見ると背中には斬られていて、横腹の傷は開いていて出血していた

美紅「昨日のケガが治ってないのに戦うからだよ」

茜「恭兄！大丈夫！？」

保健室のドアを勢いよく開けて茜が入って来て俺の近くに来た

美紅「正直重症、いっとき戦闘は無理だね」

美紅が茜に俺の状態を告げた

茜「あれ？美紅ちゃん何でここにいるの？」

美紅「恭介君をここまで運んで来たから」

茜「じゃあ美紅ちゃんが変な攻撃をしていた子？」

美紅「せめて魔法と言って欲しいな～」

美紅は魔法が使えるらしいけど使える魔法は攻撃魔法だけで回復魔法は使えないらしい

そして俺はそのまま病院送りになった

第十二話（前書き）

感想とか遠慮なく送ってください

第十二話

あれから数日…
病院に送られた俺は今日退院することになった

恭介「明日から普通の暮らしに戻るのか」

俺は病院生活を思い返していた
まず初日、茜が面会時間過ぎても病室に居続けて
何かと俺の世話をしてくれた
寝る時にベッドに平然と入って来ようとしたが追い出した

そしてその後日も茜や美紅が見舞いに来た

恭介「けど二人とも必要以上に俺の世話をしようとしてたな…」

茜はともかく何で美紅まで…
俺恩を売るようなことしてないのに…

恭介「まっいいか」

考えることを諦めて家に帰る準備をした

茜「恭兄～迎えに来たよ」

茜が病室のドアを開けてそこに立っていた

恭介「もうそんな時間か」

俺は急いで残りをかたずけて病室を出た

恭介「暑〜」

今は七月で日が照って暑くて汗が出ていた

茜「恭兄、大丈夫？」

恭介「あぁまだ大丈夫だ」

そうして家にたどり着いた俺は自室に行き部屋中隅々まであるものを探した

恭介「二個あるとは…」

見つけたのは隠しカメラ
もちろん直ぐに破壊

恭介「茜の行動がますますエスカレートしてるな…」

これは茜の部屋に行き元を叩こうと思っていた

茜は昼から学校に出ていたこれはチャンスと思い茜の部屋に入った

恭介「以外と普通だな…」

茜の部屋は予想とは違い普通に女の子の部屋だと思えるぐらい普通だった

恭介「さて…探すか」

俺は部屋中を見渡し机の上にあるノートに気づいた

恭介「茜の日記かな…」

ノートを開いた俺は鳥肌が立った

ノートの中身は日記と言えば日記なのだが…

恭介「……茜」

ノートの中身はその日の出来事や俺の様子などが書かれていた…

俺はノートを元通り机の上に置いて部屋を出た

恭介「茜が部屋に入れたがらない理由がわかった気がする…」

俺は自分の部屋に戻りスポーツウェアに着替えて外に出た

病院では寝たきりだったので体が鈍っていそうだから走ることにした

恭介「よし、誰もいないな」

俺は人気のない場所で刀を出して素振りをした

以外とはやく感覚が戻って来たのでいろいろ試してみた

独り稽古を終わりにして家に帰った

家に戻ると茜がすでに学校から帰って来ていた

茜「恭兄、トレーニングしてたの？」

恭介「あぁ体が鈍っていたからな」

茜「私も一緒にしたかったな～」

恭介「……今度一緒にしようなトレーニング」

茜「うん！」

茜は笑顔で頷いた

恭介「シャワー浴びてくる、茜覗いたらお仕置きだぞ」

茜「あはは～覗かないよ～」

茜の目は泳いでいて説得力ゼロである

とりあえず脱水所に行き隅々まで調べた

結果カメラ一台発見、即座に破壊した

そしてシャワーを浴びて、着替えてから戻ると茜が急いで脱水所に行き落ち込んだ様子で出てきた

恭介「茜…もうカメラ仕掛けてないよな？」

茜は少し青ざめて首を縦に振った

登場人物紹介２（前書き）

神北真依、西条琴音、神崎美紅の紹介です

登場人物紹介２

神北真依（かみきた まい）

職業：高校生
年齢：１７歳
伸長：１４０？

髪は黒くツインテールにしてある
恭介のクラスメイト
性格は明るくて茜の友達
恭介に顔と名前を忘れられていたことにショックを受けていた

西条琴音（さいじょう ことね）

職業：高校生
年齢：１７歳
伸長：１６０？

髪は黒に少し茶色が混ざっていてロングのストレートにしてある
恭介のクラスに転校して来たうちの一人
性格は大人しく、転校前日に恭介に助けられ恩を返そうとしたがう
やむやにされた

神崎美紅（かんざき みく）

職業：高校生
年齢：１７歳
伸長：１３０？

髪は黒のショートカット、そしてアホ毛がある
恭介のクラスに転校して来たうちの一人
性格は明るくて魔法が使えるが攻撃魔法しか使えない何故か恭介と
一緒に戦うことを望んでる

第十三話

これは夢だろうか？
俺はかすかに聞こえる泣き声の方に歩いていた
そして気がつけば目の前に幼い男の子が膝を抱えて泣いていた
俺は声を掛けようとしたが声が出なかった
そして男の子が立ち上がり俺の横を通り過ぎた
手を伸ばし男の子を止めようとしたが…

恭介「っ！？はぁはぁ」

俺は自分のベッドから飛び起きた

茜「！？恭介！？どうしたの！？」

ベッドの横に茜がいた
ドアを見るとかけたはずの鍵が解除（破壊）されていた俺はため息をついてあることに気づいた
自分の体が全身びしょ濡れだった

恭介「あれを見たせいか…」

俺は見ていた夢を思い出しながら呟いた…
そして何故か男の子が泣いていた理由を俺は知っていた
何故ならあの夢は自分の過去の記憶だからだ
しかしあの後俺が何処に行ったのかは思い出せなかった

結局思い出せず考えていた

健太「どうした？また考えごとか」

放課後健太に声を掛けられた

恭介「あぁだけどお前じゃあ絶対にわからないことだから教えてない」

健太「そう言わず教えろよ何か協力出来るかもしるないしだろ」

恭介「お前、俺が小学生だった時のこと知らねだろ」

健太「あぁ知らないな、何か関係あんのか？」

恭介「あぁ」

健太「茜ちゃんは？茜ちゃんなら知っているんじゃ…」

恭介「茜が俺の所に来たのは中学に入る少し前だ」

健太「それならアルバムとかは？」

恭介「…探してみる」

俺は席を立って一人で家にむかった

???「やっと見つけた」

恭介「誰だあんた？」

帰り道の途中、人気のない場所で知らない男に声を掛けられた
無視して逃げようと思ったが何故か相手から夜叉に似た気配を感じた

???「お前も感じるだろ俺から出てる夜叉の気配を」

恭介「な！？」

???「俺も感じるんだよお前から出てる夜叉の気配を！」

恭介「え！？」

正直あいつが言っていることがわからなかった
何故なら自分から夜叉の気配を感じると言われて信じられる訳がない

恭介「なに…言ってんだよ…俺から夜叉の気配を感じるだって？」

???「お前も夜叉の気配を感じることが出来るだろ、何故だと思う？それは自分の中に夜叉がいるからだ！」

恭介「は？嘘だろ…確かに夜叉の気配はわかるが俺の中に夜叉がいる、そんなバカなこと…」

???「あるんだよ、実際お前の目の前にいる」

恭介「お前がか…」

???「あぁそしてお前もだ」

恭介「俺は違う！」

???「お前忘れてるだろ、自分の過去の一部」

恭介「！？どうしてそれが…」

???「なら思い出せ！じゃないと俺がここに来た意味がない」

恭介「どうゆうことだ？」

???「今のお前に教えても意味がない」

そう言って男は去って行った

俺はただ立っているだけだった

第十四話

ここは何処だ？
見たことがある様な気がするが思い出せない…
話し声がする…
声がする方に顔をむけると幼い俺と誰だ？あの女性は？思い出せない…
近くに行って会話を聞くことにした
幼い恭介「お姉さんは誰？」
???「名前はないわ、ただ人からは夜叉って呼ばれてるわ」
幼い恭介「お姉さんが夜叉！？」
幼い俺は刀を取り出したが手が震えてる
???「ふふふ、別に私は人を襲う必要がないからあなたを襲うつもりはないわ」
俺は驚いてた夜叉が喋っていて尚且つ人を襲う必要がないと言っていたからだ
???「でも何もしなかったら私も消えちゃうし……そうだ、あなたに協力してもらいましょう」
幼い恭介「協力？何をすればいいの？」
???「簡単よ、私の名前をあなたが決めて、私をあなたの中に入

れる、簡単でしょ」

幼い恭介「入れるってどうやって？」

？？？「名前を決めてくれれば勝手に入るから大丈夫」

幼い恭介「わかった、なら…お姉さんの名前は……」

恭介「っ！？はぁはぁ」

目を覚ました、ここは…

どうやら家のリビングらしい

俺は目の前にアルバムを広げて寝ていたみたいだ

恭介「茜は？」

周りを見渡したが姿が見えなかった

恭介「おーい、茜ー」

茜「恭兄、どうしたの？」

茜は二階から降りてきた

恭介「俺何時間寝てた？」

茜「二時間ぐらいだけど、恭兄が寝ているうちに夕飯できてるよ」

恭介「悪いな、全部押し付けて…」

茜「気にしないで、恭兄は病院を出たばっかりだから休んでて」

そう言うと茜は夕飯を並べた

夜の夜叉探し

見事に空振り

恭介「戦いの感覚戻したかったな～」

茜「しょうがないよ、いなかったんだから」

茜と話していると…

夢で見た場所の近くに来ていた

恭介「茜…俺少し寄り道して帰るから先に帰っとけ」

茜「私も…」

恭介「俺一人で行く、大丈夫少し寄りたい場所があるだけだから」

茜「……わかった、気をつけてね恭兄」

恭介「あぁ」

そして俺は夢で見た場所にむかった

恭介「……」

何か思い出せそうだが……思い出せないというより何か引っ掛かる様な気分だった

恭介「少し歩き回るか」

とりあえず、夢で幼い俺が立っていた場所を探した

恭介「ここで俺は…」

夜叉のお姉さんに名前を付けて…何をした？あるいは何をされた？頭が痛い急に眠気が…

幼い恭介「お姉さんの名前は麻奈」

麻奈「マナ…良い名前ね麻奈って」

すると麻奈の体が光だした

麻奈「私の力を使う時は私の名前を呼んでね」

幼い恭介「わかった」

すると麻奈の体は幼い俺の中に入っていった

恭介「うぅ…麻奈…」

麻奈「はい、何でしょう？」

恭介「うわ！？」

俺は思わず飛び上がった

恭介「何でここいるの…？」

麻奈「名前呼んだでしょ、それが久しぶりに会ったときの挨拶？」

恭介「あぁごめん、久しぶり麻奈」

麻奈「お久し振りです、マスター」

恭介「マスター？」

麻奈「……まさかと思ってたけど、全部忘れてるわね…」

恭介「ごめん、全部説明してくれると助かる」

麻奈「わかったわ、まず私はマスターの中にいる、それはわかってるわね」

恭介「あぁそこは思い出せた、あと力を使うときは麻奈の名前を呼ぶことも」

麻奈「そう…なら私があなたのことをマスターって呼ぶのかは、単純にあなたの中に居させてもらってるから」

恭介「そう…ならわかった」

麻奈「じゃあ私はこれで」

そうして麻奈は俺の中に入っていった

そして俺は家にむかって帰り出した

第十五話

俺は麻奈のことは茜には話さなかった
話せば今の関係が崩れそうで怖かったからだ
そして自分の部屋に入り

恭介「麻奈聞きたいことがあるから出て来て」

麻奈「なんでしょマスター？」

恭介「前より小さくない？」

出て来た麻奈は前に見た時は長い黒髪の成人女性だったけど、今目の前にいる麻奈は見た目は変わらないが小さい、目測で３０？といったところの姿だ

麻奈「あの姿は結構疲れるんですの」

恭介「成る程…」

麻奈「聞きたいことってなんでしょマスター？」

恭介「あぁそうだった、力を俺に貸すって言ってたけど具体的にどうやって？」

麻奈「簡単ですわ、私がマスターと同化するんですの」

恭介「同化って、もうしてるんじゃ…」

麻奈「今はただマスターの中に居させてもらってるだけですわ、同化はしてませんの」

恭介「そうか…わかったありがとう」

麻奈「でわこれにて」

そして麻奈は俺の中に戻った俺は立ち上がり風呂に入った
そしてベッドに横になって寝た

朝、いつものように茜が鍵を解除（破壊）して入って来た
そしていつものように登校して席に着いていた

美紅「恭介君おはよう♪」

恭介「おはよう美紅」

美紅が後ろから話し掛けてきたので振り替えると

美紅「夜叉が出た時は私も行くからね」

小声で言ってきた

恭介「…それはダメ、そうすると茜も言い出して正体がバレやすくなる」

美紅「茜ちゃんを説得したらいいの？」

恭介「もし仮に出来たとしても毎回はダメ、変な噂を言い出すやつ

が出てくるから」

美紅「わかった…毎回一緒に戦うのは止めるけど時々私も行くからね」

恭介「わかった」

美紅はそれを聞くと笑顔で立ち上がり茜の所に行ったおそらく茜を説得しているのだろう

恭介「そういえばもうじきテストか…」

ちなみに俺と茜は二人とも夜叉から学校の生徒を守っていれば無条件で進級可能である（俺が校長を説得した）

恭介「俺には関係無いけど…」

健太「よぉ恭介、もうじきテストなのに余裕やな～」

恭介「まぁな」

美紅「恭介君、茜ちゃんを説得できました」

恭介「マジで…」

美紅「マジです」

健太「どうゆうこと？俺にも説明して」

恭介「お前には関係無い」

美紅「磯谷君には関係無いことです」

健太「二人とも酷い！？」

健太はそのまま固まっていた

教室のドアが開き先生が来た…そして席に着いてない健太に先生が生徒名簿で叩いた

健太「うご！？」

先生「磯谷、とっとと席に着け」

健太「はい…すいません」

朝からおもしろい光景を見たと思って笑っていた

第十六話

授業中にて

美紅「恭介君まだ夜叉出て来ないの～」

小声でしかもシャーペンで背中をつつきながら言ってきた

恭介「そぉ易々と出てくるわけないだろ」

美紅「えぇ～つまんな～い」

恭介「とにかく今は授業に集中して」

俺は前をむいて授業に集中したが…

美紅「ねぇ～まだ～」

再び背中をシャーペンでつついてきた

俺は無視して前をむいていた

ツンツン

ツンツン

ツンツン

ツンツン

グサッ！？

恭介「ッ！？」

思わず声が出そうになったが堪えたが

先生「どうした山本？」

恭介「いえ…何でないです」

バレていた…

後ろ見て思わず殺気を美紅にぶつけたら

美紅「ごめんね…恭介君…」

かなり怖かったのか怯えた様子で謝ってきた

恭介「もうしないでよ」

そう言って前をむこうとしたが

恭介「美紅、俺が出て五分後に出て」

俺は立ち上がり

恭介「先生具合が悪いので保健室に行ってきます」

先生「わかった、気をつけて行けよ」

そして教室を出て保健室にむかった

恭介「あれ？いつものマスクがない…」

いつも俺が使っているマスクがなくて代わりに別のマスクが置いてあった

恭介「これ割れやすいやつだし…」

あの校長めー

取り敢えずこれにするか…他には茜と美紅のしかないし…

グラウンドにて

恭介「さすがに今回はさせるかー」

いたのは人型（二体）と獣型（二匹）である…

どうしよう…混合型（二体）になったら…

恭介「やばい…混ざりやがった…」

目の前には人型をベースにした混合型が二体いた

美紅「お待たせ～うわ！？何こいつら見たことない」

恭介「来るのが遅いよ…取り敢えず」

俺は拳銃を取り出し全弾学校の壁に撃った

恭介「これだけ撃てば気づくだろ…」

美紅「何したの？」

恭介「茜を呼んだ」

美紅「えぇ～こいつら私たちで充分だよ」

恭介「これと同じタイプのやつと一対一でしたら、死にかけた」

美紅「それ本当？」

恭介「あぁ」

俺はすでに出してある刀を構えた

恭介「取り敢えずこいつらを食い止めるか、倒すぞ」

美紅「わかった」

俺は夜叉たちに接近した

美紅は後ろで術文を唱えていた

美紅「我に仇なす敵を焼き払え、ファイヤー」

夜叉に二発ずつ、火の玉が当たったがそれぞれ炎を振り払った

恭介「これならどうだ」

俺は夜叉一体を一閃したが止められた

そして…

恭介「ぐっ」

蹴り飛ばされた、腹に激痛が走った
俺はすぐに体制を立て直して再び接近したが
美紅「きゃ！」
一体の夜叉が美紅を襲っていた
すぐに美紅を助けに行ったが
美紅「我に仇なす敵に永遠の眠りを、アイスバーン」
美紅の目の前にいた夜叉が氷漬けになっていた
そして…
美紅「押し潰しちゃえ、グラビティ」
氷漬けになった夜叉が一瞬で粉々になって潰れた
恭介「大丈夫か美紅？」
美紅「大丈夫です、けど魔力を使いすぎて、魔力が殆どないです」
恭介「わかった、美紅は下がって」
俺は刀を構えて一気に夜叉に接近した
そして…
激しい攻防を繰り広げた
恭介「くっ！？」
ピキッ

避けたと思った攻撃が被っているマスクをかすめていた
俺は構わず斬撃を繰り出したが
結果は変わらず
また激しい攻防を繰り広げた
そして…

恭介「はぁはぁ」

疲労困憊である
だが夜叉は疲れ知らずで攻撃の勢いがぜんぜん落ちなかった
夜叉の攻撃が体をかすめ始めた

恭介「ぐっ」

体制を崩してしまった
やばいと思ったがすでに遅かった
夜叉の蹴りをモロに受けて地面を転がった
そして俺は立ち上がり

恭介「マ…」

麻奈と言おうとした時

タァーン

銃声が響いた
そして夜叉の腕に穴が開いていた
俺は屋上で茜がスナイパーを構えてるのを見た

恭介「茜か…助かった」

タァーン
タァーン

続けて二発の銃声が響くと夜叉の頭が砕けていた

恭介「…どんだけ強い弾使ってるんだよ…」

俺は茜の銃の腕を再確認した

保健室にて
俺は傷を消毒していた

茜「恭兄、今回は間に合って良かったよ」

恭介「そうだな、今回は茜に助けられた」

美紅「にしても茜ちゃん、もう少し早く援護出来なかったの？」

茜「実はどうやって援護するか迷ってたんです」

恭介「生徒たちが騒いでて合図が聞こえなかったじゃなくて？」

茜「はい、これを見て下さい」

そう言って茜は違う形のスナイパーを二丁取り出した

茜「片方が今回使ったやつですが、もう片方が…」

そう言って茜は引き金を引いた

ダダァン

二発連続で出た

茜「どちらで撃つか迷って遅れました」

恭介＆ａｍｐ；美紅「……」

呆れて何も言えなかった

教室に戻ると健太が騒いでいた

健太「恭介今日の…」

恭介「断る」

健太「まだ何も言ってないのに」

恭介「はぁ～、聞くだけだぞ」

健太「また夜叉が出たんだよ、そして例のやつが戦ってたんだけど
途中でちっちゃい魔女っ娘がきたんだよ」

恭介「へぇ～それで？」

健太「だから今日の放課後…」

恭介「断る！！」

健太「いいじゃん、手伝ってよ」

恭介「嫌だ、そろそろ先生来るぞ」

そう言って俺は席に着いた

放課後健太がひつこかったが

恭介「お前部活あるだろ」

健太「そうだった」

健太を追いやるにはこの手が一番だと実感していた

そして俺は学校を出た

第十七話

家に帰る途中……

???「思い出せたか？」

恭介「あぁおかげさまで…で、お前の目的は何だ？」

???「そう焦るな、まずは自己紹介だ、俺は菊野智治(きくの ともはる)だ」

恭介「俺は山本恭介だ」

菊野「で、目的だが…山本に手伝って欲しいことがある」

恭介「俺にか？」

菊野「あぁ」

恭介「何故だ？」

菊野「理由はお前も俺と同じ夜叉が体の中に居るからだ」

恭介「それだけ？」

菊野「あぁ夜叉が体の中に居るということはそれなりに実力があるということだ」

恭介「そうか…で、何をするんだ？」

菊野「やってくれるのか？」

恭介「話を聞くだけだ」

菊野「人工的に力を持った人を作ろうとしている組織がある…」

恭介「それを一緒にやっつけようと」

菊野「そうゆうことだ」

恭介「でもさ、力がつくって結構いいことじゃ…」

菊野「いいや、そもそも成功すると思うか？」

恭介「…しないだろうな」

力を持った人を作ることができるわけがなかった
力は力を持った一族の特徴だったり、偶然子供が力を持って産まれるという場合にしかあり得ないからだ
それを人工的に可能にするとなると…

恭介「俺らのような一族が狙われるということか」

菊野「その通り、そして捕らえられたヤツは研究材料にされるだろうな一生」

恭介「それだけはなんとしても止めないといけないな」

菊野「協力してくれるか？」

恭介「もちろん、けど二人だけで大丈夫だろうか？」

菊野「俺の方は二人協力者がいるがお前は？」

恭介「事情を話して手伝ってくれそうな人は二人いるが…」

正直、茜と美紅は巻き込みたくなかった

もしかしたら人を殺すことになるかもしれないからだ…

菊野「そいつらも事情があるからな…一応これ俺の連絡先」

菊野は俺に電話番号が書かれた紙を渡した

恭介「ありがとう、決まったら連絡する」

菊野「わかった、それじゃ」

菊野はその場を立ち去った

恭介「茜、話がある」

俺は夕飯の時に話を切り出した

茜「なにかな恭兄？」

恭介「実は……」

俺は菊野と話したことを茜に話した

恭介「……と言うわけだが」

茜「恭兄…私も手伝わせて」

恭介「いいのか？人を殺すことになるかもしれないんだぞ」

茜「恭兄を一人でそんなことさせる方が嫌なの」

恭介「そうか…ありがとうな茜」

茜「恭兄だけに辛い思いさせる訳にいかないしね」

そうして茜も協力してくれることになった

次の日学校で…

恭介「……と言うわけなんだ」

美紅「…私もやる」

恭介「いいのか？人殺しになるかもしれないぞ」

美紅「恭介君は人殺しになる覚悟があるんでしょ？それなら少しでも重荷は軽い方がいいでしょ」

恭介「美紅、ありがとうな」

美紅も協力してくれることになった

俺は昼休み、菊野と連絡を取った

恭介「こっちも二人協力してくれることになった…」

菊野「そうか…いいんだな」

恭介「あぁ、二人の覚悟は確かめた」

菊野「そうか」

恭介「最後に確認、俺はお前らが裏切った瞬間、俺は必ずお前らを殺す」

菊野「わかった、そして俺も裏切り者は必ず殺す」

恭介「わかった、肝に命じておく」

菊野「みんな一回集まって顔ぐらいは知りたいんだがいいか？」

恭介「わかった、場所は？」

菊野「俺とお前が会っている所でいいか？」

恭介「わかった、二人に伝えとく」

俺は電話を切ると茜と美紅に伝えた

放課後、俺は茜と美紅を連れて約束の場所まで来た

恭介「意外と早いんだな菊野」

菊野「俺は約束は守る方だぞ、でその二人がお前の協力者か…」

恭介「あぁお前の協力者は何処だ」

菊野「もうじき来るはずだが…」

???「はるちゃん遅れてごめん」

???「菊野君…場所の説明が適当で探すの苦労した」

菊野「菜緒子に葉山さん、来るのが遅い」

恭介「この二人は？」

菊野「ちょうどいい、みんな自己紹介しよう、俺は菊野智治だ」

恭介「俺は山本恭介だ」

茜「私は山本茜です」

美紅「私は神崎美紅だよ♪」

佳山「私は佳山菜緒子（かやま なおこ）です」

見た目は髪が少し茶色がかかっていてサイドテイルにしている、身長は１６０？ぐらいだろうと思う

葉山「私は葉山綾音(はやま あやね)です」

見た目は髪が一纏めにしてあって長かった、身長は１５５?ぐらいだろうと思う

佳山「二人は同じ苗字だけど兄妹?」

恭介「直接血は繋がってないが兄妹だ」

葉山「そうなんですか?珍しいですね」

茜「親がいろいろと大変なの」

恭介「そうゆうこと」

佳山＆ａｍｐ;葉山「そうですか…」

恭介「菊野には言っといたけど再確認だ、俺は俺たちを裏切ったヤツを必ず殺す、それだけは覚えとけ」

菊野「逆に俺も俺たちを裏切ったヤツを必ず殺すからな」

そうして俺と菊野は握手して互いに約束した

決して裏切らないことを…

第十八話

俺たちは広い空き地に来ていた

菊野「ここならいいだろう」

恭介「何かするのか？」

菊野「互いの力の確認をした方が連携取りやすいだろ」

恭介「なるほどな、なら俺の力は…」

俺は刀を取り出した

恭介「こういうのを空間から取り出すのが俺と茜の力だ」

菊野「へぇ～妹さんも同じ力か…」

茜「厳密に言うとちょっと違うんですけどね、私は刀を取り出すことはできないです」

葉山「何が出せるの？」

茜「こういうのです」

茜は拳銃を取り出した

佳山「なるほど～」

恭介「菊野、お前は？」

菊野「俺はこれだ」

菊野は一瞬で俺の後ろに立っていた

菊野「自己強化、コンクリなら簡単に壊せるぐらい強化できる」

恭介「こうゆう風に？」

俺は近くにあった土管を殴った
すると土管の中心あたりが砕け散った

菊野「…お前強すぎだろ」

恭介「親がスパルタだっただけだ」

佳山「……私はこれ」

俺に圧倒されてた佳山さんがさっき土管を殴った時にできた傷を治した

恭介「あ、ありがとう」

美紅「菜緒子ちゃんも魔法使えるの？」

佳山「私は傷の治療と防御魔法しか使えないの」

美紅「私は攻撃魔法しか使えない」

恭介「二人が一緒にいたら後衛は充分だな」

茜「私は～」

恭介「茜は前衛と後衛どちらもできるだろ」

葉山「え～とそろそろ私の力を見せたいんですけど…」

恭介「あ、葉山さんごめん」

葉山「私の力はこれ」

葉山さんはスカートの中からナイフを取り出した
そして俺に斬りかかった

恭介「危な！」

俺は咄嗟に出してた刀で防いだが

恭介「え？」

刀が折れた、いや刀が斬られた

葉山「私は大抵のものなら斬れるんです」

恭介「だからって斬りかからないで…」

危うく反撃するところだったし

恭介「夜叉の攻撃も耐える刀を斬るとか本物だな、その力…」

俺は斬られた刀を少し上に投げた
菊野「おい、いくらなんでも刀を捨て……」
地面の中に刀が消えるのを見て菊野は言うのを止めた
恭介「茜もそれ消しとけよ」
茜「わかった」
茜は拳銃を手放した
すると刀同様地面に消えた
佳山＆ａｍｐ；葉山「……」
恭介「どうした二人とも？」
佳山「取り出した武器って他人に渡せる？」
恭介「試してみるか？」
俺は刀を取り出した
そして佳山さんに渡した
佳山「あ、持てた」
恭介「手渡しなら渡せるんだけど…」
俺は鞘に入った刀を取り出し

恭介「菊野、パス」

菊野に投げた

菊野「真っ直ぐ投げるな、当たったらどうすんだよ」

菊野は刀を避けた

恭介「…仕方ない、葉山さん」

俺は再び鞘に入った刀を取り出し今度は優しく葉山さんに投げた

葉山「え！？あ、はい……あれ？」

しかし葉山さんは刀を取ることは出来なかった

何故なら刀が葉山さんの手をすり抜けたからである

恭介「投げて武器を渡すことは出来ないんだよ」

佳山「取り敢えずこれどうすればいいの？」

佳山さんは持っている刀を指差して聞いてきた

恭介「投げ捨てれば消えるから」

佳山「わかった」

佳山さんは刀を投げ捨てた

恭介「それじゃあ菊野、行動する日時を教えてくれ」

菊野「行動開始は二日後その間に各自で準備してくれ」
そして俺はその場で解散した
菊野「恭介、ちょっといいか」
恭介「ん？なんだ」
菊野から呼び止められた
菊野「お前あの力はどれくらい使いこなせるか？」
恭介「まだ使ったことがないからわからん」
菊野「それじゃあ明日休みだろ、朝から俺と特訓するぞ」
恭介「わかった、場所はここでいいか？」
菊野「あぁそれじゃあ、朝の９時にここに来てくれ」
恭介「９時だな、わかった」
そうして俺たちはその場を離れた
茜「恭兄、菊野さんと何を話してたの？」
恭介「あぁ明日の朝から特訓しおうと誘われた」

茜「私も行っていい？」

恭介「多分特訓内容は模擬戦だから茜は無理だ」

茜「なんで？」

恭介「茜は接近戦にも銃を使うだろ」

茜「私、格闘技も使える…」

恭介「わかった、ちょっと待ってろ菊野に聞いてみる」

俺は携帯を取り出し菊野にかけた

菊野「どうした？」

恭介「一人追加、茜が駄々こねて聞かない」

菊野「しゃーない、わかった」

恭介「すまんな」

菊野「気にするな、ただあれの練習出来ないかもしれないぞ」

恭介「わかってる」

菊野「そうか、なら切るぞ」

恭介「あぁ」

俺は携帯をしまうと茜に

恭介「茜、一緒に来ていいだとよ」

茜「ありがとう恭兄」

恭介「気にするな」

俺は明日のことを考えながら家に帰った

第十九話

恭介「これでいいかな…」

俺は二日後の準備をしていた（自分の部屋で）

取り敢えず、医療セットと手袋（指の部分がないヤツ）あと携帯食料を用意した

恭介「あとは明日菊野と特訓してからでいいか」

俺はベットに横になって寝た

朝、まぁいつものように茜の襲撃にあった

それから朝食を食べて俺と茜は昨日の空き地にむかった

恭介「菊野は…まだ来てないな」

流石に早すぎた

予定してたよりも２０分前に来てしまった

恭介「しょうがない、茜軽くやるぞ」

茜「わかった」

俺は小型ナイフ二本、茜は拳銃を二丁（どちらもサプレッサー付き）取り出した

そして少しの沈黙の後、互いに接近して
俺は茜の銃の銃口をずらしながらナイフで茜を攻撃して、茜は俺の攻撃を銃で防ぐか避けながら俺に銃口をむけて撃っていた
そしてそのやり取りを5分間してから今度は格闘技も加えてやっていた

菊野「すまん遅れた……てお前ら何殺り合ってんだ？」

恭介「ん？菊野か」

俺は茜の蹴りと銃撃を避けながら菊野が来たことに気づいた

恭介「茜、ストップ」

茜「もう終わり？」

恭介「そう残念がるな、菊野が来たぞ」

茜「あ、菊野さんいたんですか」

菊野「何気に妹さんは痛いことを言う」

恭介「こっちの準備運動は済んだが、お前は大丈夫か？」

菊野「今のが準備運動かよ…俺なら大丈夫だ」

そう言って菊野は手に持っていたバッグからグローブ（手の甲と指の部分に装甲がある）を取り出した

菊野「それじゃあ始めるか」

菊野は俺に一気に接近して殴りかかった
俺はそれを避けてナイフで反撃した
そしてお互いに避けたり攻撃したりであった

恭介「ちょっと本気だすぞ」

俺は後ろに跳びながら両手のナイフを捨てて
少し長めの木刀を取り出した

菊野「じゃあ俺も少し本気だすぞ」

菊野の動きはさっきより速くなっていた
それから再び避けたり攻撃したりしてたが

恭介「ぐっ」

菊野「くっ」

お互いの攻撃が当たり始めていた
俺は少し距離を置いて

恭介「こっから先は本気でやろう」

菊野「明日にひびかない程度にな」

そっから先は気を抜けなかった
少しでも気を抜いたら菊野の本気の攻撃が当たりそうだったからだ
それは菊野も同様のようで表情に余裕がなかった
激しい攻防の中で俺は何故かこの状態を楽しんでた

そして俺が横に一閃すると菊野は防ぎきれず体制を崩した

恭介「これで終わりだ」

俺は木刀を菊野の顔の前に突き出した

菊野「あぁ俺の負けだ、それよりお前その顔…怖いぞ」

恭介「え！？」

菊野「途中からまるで楽しんでいたようだったぞ、さっきは木刀だったから良かったけど…刀だったら今ごろ俺は真っ二つだぞ」

恭介「あっ、すまん」

菊野「少し休憩しとけ、その間妹さんと特訓してるから」

恭介「わかった、茜、交代だ」

茜「恭兄、わかった」

俺は茜と入れ替わりで休憩をとった

そして一抹の不安を感じたもし俺が人と殺り合う時にまたあの感情が出てくるか不安でしょうがなかった

第二十話

俺は玄関の前に立っていた理由は簡単、茜に締め出された…

恭介「……」

まずどうしてこうなったかというと茜に爆弾系（Ｃ４とか）の物を出せるかどうか聞いたらこうなった

何故爆弾系の物が必要かというと明日のしめに使うつもりだからだ

恭介「まさか茜に追い出されるとは…」

まさしく予想外だった

出せるかどうか聞くだけのつもりが家から追い出されるとは…

恭介「学校にあれを取りに行くか…」

俺は学校にむかった

もちろん土曜日なので一部の生徒や先生しかいない

そして目的の物は保健室にあるはずだ

恭介「お、あったあった」

俺は目的の物、自分たちの変装用（顔だけ）のマスクを持ち出した

そして学校を後にした

再び家の玄関前

取り敢えずチャイムを押してみた

茜「はーい、どちら様ですか？」

恭介「恭介だけど…入っていいか？」

茜「あ、恭兄ちょっと待ってて」

ドタドタ、バタ、ガチャ

茜「あはは、ごめんね追い出して」

恭介「まず理由を聞こうか」

茜「え～と、爆弾系の物を作ってたから」

恭介「それだけ？」

茜「それだけ…」

恭介「色々聞きたいが取り敢えず中で話そう」

茜「そうだね」

そして俺は茜を質問攻めにした

それから学校からマスクを持ち出したことも伝えた

恭介「茜、一応確認な」

茜「何？恭兄」

恭介「本当にそれ茜が作ったのか？」

茜「そうだけど」

テーブルの上に置いてあった爆弾は本格的な出来映えだった

茜「それから私こうゆうのが出せるようになった」

茜はそうゆうと手榴弾とＣ４爆弾を取り出した

恭介「……」

まぁ確かに練習すれば出せなかった物も出せるようになるけど…それでも得意、不得意があってどうしても出せない物もあるが茜にとって爆弾系の物は不得意ではないらしい…

恭介「明日のしめには茜が必要になったな…」

茜「そういえば何で爆弾が必要なの？」

恭介「明日目標の装置とかその他もろもろを破壊するため」

茜「…恭兄徹底的にやるんだね」

茜が呆れてるように見えたが気のせいだろ

それにしてもこれで明日の準備が整った

明日はうまくいくことを願った

第二十一話（前書き）

更新遅れました
すいませんm（__）m
受験で忙しくて内容が思い付かなかったんです

第二十一話

俺たちは空き地に来ていた理由はここが集合場所だからだ

恭介「菊野たち来ないな」

茜「まだ集合時間の１０分前ですよ」

美紅「そうだよ恭介君、美紅たちが早すぎただけだよ」

恭介「それもそうか…」

ただじっと待つのも暇だから

恭介「茜、美紅少し俺から離れて」

茜&美紅「何で？」

恭介「少し体ば動かすから」

納得したのか茜と美紅は俺から少し距離をとった

俺はそれを確認してから鞘に入った刀を取り出した

そして抜刀と帯刀を繰り返し…一閃した

もちろん空振り

また帯刀してから一閃したそれを何回か繰り返して帯刀した状態で

格闘の練習をした

しばらくそれをやっていると

菊野「お前ら思ったより早いな、恭介は張り切ってるな」

恭介「菊野、他の二人は？」

菊野「もうそろそろ来るはずだが…」

佳山「ごめ～ん、遅れた？」

葉山「すいません、私が最後ですか…」

恭介「時間内に来てるから謝らなくていいと思うけど…それに俺らが早すぎただけだ」

佳山「そうなの？」

恭介「あぁ、だから謝らなくていい」

そして俺は菊野に目的の場所を聞いたそして俺たちはその場所にむかった

恭介「菊野、そういえばお前はどうやって場所とか研究内容の情報を知ったんだ？」

菊野「情報収集に特化した友達がハッキングした時に偶然発見したらしい」

恭介「佳山さん、菊野にそうゆう友達いるのか？」

佳山「いるにはいますけど…私はあの人苦手～」

菊野「そうゆうなってアイツはアイツでいいとこあるぞ」

佳山「例えば？」

菊野「無料で良品な情報を教えてくれたり、無料で頼めば欲しい情報を探してくれる」

佳山「私にはお金取るのに…何ではるちゃんは無料なの…」

菊野「人のプライベートな情報はさすがに俺でも金を取られるぞ」

佳山「そうなんだ…」

恭介「それよりも、もしかして目の前にある森に入るのか？」

菊野「あぁそうだぞ」

恭介「茜、美紅はぐれないようにしろよ」

茜「恭兄」

美紅「恭介君」

恭介「何だ？」

茜&美紅「手を握って」

恭介「何で？」

茜&美紅「はぐれないように」

二人は顔を赤くして言ってきた

恭介「恥ずかしいなら、ロープがあるが使うか？」

茜&美紅「うん、そっちにして」

菊野「恭介って鈍感？」

佳山「はるちゃんも人のこと言えないよ」

葉山「山本君も菊野君も鈍感です」

菊野「何で俺も！？」

佳山「自分で考えたら」

恭介「何言い合ってるんだ？」

茜「さぁ～」

美紅「でも美紅たちにも当てはまる内容な気がする」

そんなこんなで三人をロープで繋いだ

菊野たちは特にこれといって何もしていなかった

そして森の中を進んでいると目の前に研究所らしき建物が見えた

恭介「あの様子から確定でいいんじゃね？」

菊野「警備が四人ってそれだけで決めるのかよ」

恭介「他に建物がないが、それでもか？」

菊野「それもそうだな」

恭介「茜、美紅後方で援護頼む」

茜「わかったよ恭兄」

美紅「任せて恭介君」

俺はロープを外して鞘に入った刀を取り出した
そして抜刀せず警備員に接近して刀で殴って二人気絶させた
横を見ると菊野が残り二人を気絶させていた
そして俺たちは研究所の中に入って行った

第二十二話

研究所の中は意外と静かだった

恭介「菊野、何か変じゃないか？」

菊野「あぁ確かに」

美紅「何が変なの？」

恭介「監視カメラに映っているはずなのに警報すらなっていない」

菊野「それと人の気配がない」

茜「それは確かに変ですね」

佳山「取り敢えず先に進んでみよう」

俺たちは研究所内を歩き回りそして…

葉山「これは…血ですね」

目の前には何かを引きずった後のような血の跡があった

そしてそれは目の前の扉に続いていた

恭介「どうする？調べるか？」

菊野「恭介、お前何かを感じないか？」

恭介「あぁ何かの気配がするから俺は調べるつもりだが…」

菊野「この気配、夜叉に似ていないか？」

恭介「似ているが違うなこれは…」

菊野「どうする？」

恭介「二手に分かれよう、俺はこの中を調べるが菊野は他の場所を調べてくれ」

菊野「他の四人は？」

恭介「そうだな…茜と葉山さんは俺と、美紅と佳山さんは菊野と一緒に行動でいいか？」

美紅「えぇ～美紅、恭介君と一緒がいい～」

恭介「美紅…これが終わったら何でもしてやるから菊野と一緒に行ってくれ」

美紅「…わかった」

菊野「それじゃあ決まりだな」

恭介「菊野、美紅を頼んだぞ」

菊野「恭介こそ葉山さんを頼んだぞ」

そうして俺たちは菊野たちと別れて行動した

恭介「茜、手榴弾を出してくれ」

茜「わかったよ恭兄」

俺は茜が手榴弾を取り出すのを確認するとドアノブに手を掛けて

恭介「茜、俺が扉を開けたら手榴弾を投げ入れてくれ」

茜は頷き、俺は扉を思いっきり開けた

そして茜が手榴弾を投げ入れたのを確認して扉を閉めた

爆発音が聞こえたのを確認して刀を取り出した

恭介「戦闘準備ばしておけ、中のヤツはまだ倒せてない」

二人は頷きそれぞれ武器を取り出した

そして俺は扉を再び思いっきり開けて中に突入した

中の光景はまさしく地獄だった

壁や床は血だらけであちこちにある死体はほとんど切り裂かれていた

吐き気が込み上げたが何とか堪えて二人を見たが我慢できず吐いていた

恭介「大丈夫か？無理なら外に出ても…」

葉山「大丈夫です、私はまだいけます」

茜「私も～まだ大丈夫」

恭介「そうか、気を付けろよ敵がこっちに気付いたみたいだから」

すると部屋の奥から何か俺にむかって飛んで来た
慌てて刀で斬ったが

恭介「血！？」

斬ったものから血が出てきた
そして俺の体についた
その瞬間に体の奥底から何かが這い出てくる感覚がしたがそれを堪えて斬ったものを確認した
俺の足元に落ちていたのは研究服らしきものを着た死体だった
俺はそれが飛んできた方向を見るとそこには夜叉に似た何かが立っていた

第二十三話（前書き）

投稿遅れましたすいません？
話がうまくまとまらなくて時間がかかりました

第二十三話

俺は驚いていた
部屋に突入して目の前にいたのは女の子だった
しかし手には黒い武器のような物を持っていて髪は赤くて目が赤く
耀いていた
更に体からは黒いオーラを出していて体のほとんどが黒い鎧のよう
な物で覆われていた
その姿は夜叉に似ていた

恭介「こいつは夜叉なのか…？」

茜「恭兄、少なくとも普通の人じゃないのは確かだよ」

葉山「そして夜叉じゃないのも確かです」

恭介「だがこいつから感じる気配は夜叉の気配に似ている」

茜「そうなの恭兄！？」

葉山「それは本当なの山本君！？」

恭介「あぁ確かに夜叉に似ている…けど何かが違う」

茜「それより恭兄、むこうは殺る気だよ」

目の前の女の子？から殺気を感じた
俺たちはそれぞれ武器を構えた

恭介「茜は援護を頼む、葉山さんは茜の護衛を頼みます」

茜「わかった」

葉山「わかりました」

俺は女の子？に接近して刀で斬りかかった
しかし手に持った武器で防がれた
すかさず俺は回し蹴りをして刀で斬りつけた
腹に着いていた鎧にヒビが入った
更に俺はヒビが入ったところに攻撃を加えて鎧を破壊した
そして腹を斬りつけた
しかしバックステップで避けられて斬撃は腹をかすめた

恭介「！？赤い血だと…」

斬れた部分からは赤い血が流れて出ていた
俺はその時ある可能性を考えた

恭介「茜、もしかしたらあいつは人間だ」

茜「それはどうゆうこと！？」

恭介「これから試す、茜たちはこの部屋から出て待機してくれ」

茜「何で！？」

葉山「どうしてですか！？」

恭介「危ないのと、茜たちには部屋の外の警戒をしてほしいから」

茜「…わかった」

葉山「行ってきます…」

二人は部屋の外に出た
それを確認した俺は

恭介「麻奈…いけるか」

麻奈「はい、マスター」

俺は麻奈を呼び出した

麻奈「それではいきます」

麻奈は俺の体と重なる様に一体化した
すると俺の体に変化が起こった
髪は長くなり、目が赤く耀いた
更に体の中から力が溢れてくる感覚がした

恭介「なんか変な感覚だなこれ」

麻奈「ふふふ、私は嫌いじゃないわ」

恭介「そうかい、それじゃあ気絶させるだけだぞ」

麻奈「了解、マスター」

俺は刀を構えて力を流し込んだ

刀の刀身が黒く光だした

恭介「いくぞ」

俺は女の子？に接近した

女の子？は俺に応戦したが戦闘経験が無いのかそれともただ力が暴走しているみたいだったので簡単に気絶させることができた

恭介「これじゃあ麻奈を呼んだ意味あんのか？」

麻奈「あるんじゃない、一応私と一体化する感覚には慣れたんじゃない？」

恭介「あぁ確かに慣れたな」

麻奈「ならいいじゃない、それじゃあ戻すわよ」

恭介「わかった」

麻奈は俺の体から出てきたすると俺の体は元通りになった

恭介「麻奈、一つ聞きたいことがある」

麻奈「何？あの子から夜叉を剥がしとるなら無理よ」

恭介「やはりあの子の中に夜叉がいたのか…」

麻奈「気づいてたんでしょ？そうじゃなきゃ気絶させるとか言わないでしょ？」

恭介「確証が無かったが十中八九そうじゃないかと思ってた」

麻奈「そう…けどどうするのあの子」

麻奈は倒れてる女の子の方を見た

恭介「起きて話せるようなら事情を聞くつもり」

麻奈「そう…なら私は戻るわね」

そう言って麻奈は俺の中に入っていった

俺は外にいる二人を呼び出して女の子が起きるのを待った

しかし全然起きなかったので俺が女の子を運んで部屋を出た

俺たちは菊野たちが行った方にむかって移動していた

茜「恭兄、そういえばその子誰？」

恭介「もちろん、さっきの部屋にいた子」

茜「でも全然同一人物には思えないけど…」

茜の意見は最もだった

何故なら女の子の見た目は戦闘してた時と違い髪は赤ではなく黒で

体の鎧は完全になくっていて普通の服を着ていた

恭介「残念だがこの子とあの部屋にいた子は同一人物だ」

茜「そう…でも……」

恭介「話しは後だそれよりも起きたぞ」

茜「え…」

女の子「……」

女の子は目を開けていた

俺は女の子を降ろそうとしたが俺にしがみついて離れなかった

女の子「やだ…このままがいい…」

恭介「わかった、取り敢えず名前を教えてくれないか？」

女の子「…如月遥（きさらぎ はるか）」

恭介「わかった、俺の名前は山本恭介だ」

茜「私は山本茜だよ」

葉山「私は葉山綾香です」

茜「遥ちゃんは恭兄からどうして離れたくないのかな？」

恭介「茜、そんなに怖い顔をしてたら怯えて何も言えないぞ」

遥「あの人怖いです」

怯えた様子であったそしてどうしても離れたくないのか両足で腹を挟んで両手で肩をしっかりと掴んだ

恭介「茜、怖がらせたらまともに話せないだろ…」

茜「う、ごめん」

恭介「遥、いろいろ聞いていい？」

遥「…うん」

恭介「どうしてここにいたの？」

遥「ここに住んでるから…」

俺は遥の言ったことを余り疑わなかった

遥を見つけた時の状況である程度予想はしていたからだ

恭介「…じゃあ次は遥は何か特別なことが出来る？」

遥「特別なこと？」

恭介「例えばこれ」

俺は刀を取り出した

遥は驚いていた

遥「お兄ちゃんすごーい」

茜「お、お兄ちゃん…」

茜の眉間にシワがよって、殺気を出し始めた

恭介「茜耐えろ」

茜「う、うん」

恭介「それで遥は何か出来る？」

遥「遥はお兄ちゃんみたいなこと出来ないよ、それに周りにいたおじちゃんたちは遥のことを何も言わなかった」

恭介「ありがとう、じゃあ両親は誰かわかる？」

遥「わからない、遥のお父さん、お母さんは見たことないの…」

恭介「ごめんね、辛いこと聞いて」

遥「いいの、お兄ちゃんになら何聞かれても平気だから…」

茜「ムムムー」

葉山「茜ちゃん堪えて」

後ろの方で葉山さんが茜を抑えているのが見えた

恭介「遥、最後にこれには後ろの二人には聞こえないように答えて、遥の中に誰かいる？」

遥「うん、遥のお友達がいるよ」

恭介「ありがとう、遥はこれからどうするの？」

遥「何で？」

恭介「俺らがここを破壊するから…」

遥「……」

遥は押し黙った

俺たちがここを破壊することがショックなのだろうか遥は何も言わなかった

恭介「茜、葉山さんここの研究所が何をしているのかがわかった」

茜&葉山「本当なの（ですか）！？」

恭介「あぁあくまで俺の予想だがな」

葉山「え？でもここって私たちのような力を持った人間を人工的に作り出す為の場所じゃ…」

恭介「葉山さん、そもそもそんなことする為に必要なものは何か知ってる？」

葉山「それって私たちのような力を持った人間のＤＮＡですよね」

恭介「そうそう、けど普通の人たちの中に紛れ込んでる俺たちのような力を持った人間を発見するのは不可能に近いんだよ」

葉山「そう言われればそうですね」

恭介「だから、ここの連中は切り替えたんだ」

葉山「何にですか？」

恭介「俺のような存在を作り出すのにだ」

第二十三話（後書き）

えーと、この小説を書き終わるもしくは書いてる途中で新しい小説を書こうと思っています

詳細は後日伝えるつもりです

そして更新ペースはだんだん遅くなっていますが

これからもよろしくお願いいたしますm（__）m

第二十四話

茜「恭兄…それはどうゆうこと…」

茜は驚いた様子で聞いてきた

茜「恭兄と私の力は同じだから私も該当するんじゃ…」

恭介「茜…俺が出来て茜が出来ないことは？」

茜「夜叉の気配を感じることだよね」

恭介「何で出来るか解るか？」

茜「それは…解らないけど…」

恭介「それはだな…」

葉山「待ってください、夜叉の気配を感じることに関しては菊野君も出来ますよ、なら菊野君も該当するんじゃないんですか？」

俺は苦虫を噛んだきぶんだった

まさか葉山さんが感ずくのがあまりにもはやかったからだ

恭介「いいや、あいつは俺とは違う…はずだ」

葉山「そう…ですか…」

恭介「じゃあ本題に移るぞ」

葉山「はい」

俺は最初に茜たちには聞こえないように

恭介「麻奈、茜たちにお前の姿は見えるのか？」

麻奈「可能よ」

確認した俺は

恭介「麻奈、出てきてくれ」

麻奈「ここにいるわよ」

麻奈は俺の後ろから出てきて、そして俺に抱きついた

茜「恭兄…その人誰？」

葉山「さっきまでいませんでしたよね…」

茜は殺気を出しながら、葉山さんは驚いた様子で聞いてきた

麻奈「顔を合わせるのは初めてだったわね、マスターの中に住んでる夜叉の麻奈よ」

茜はそれを聞いた途端に銃を取り出し、麻奈を撃った

麻奈「小娘…マスターに感謝した方がいいわよ」

茜「え？」

茜は自分に何が起こったのか理解していなかった

麻奈「小娘…次は殺すから、私に攻撃しない方が身のためよ」

茜「何にを言って…」

茜が言い終わる前に、茜が持っていた銃がバラバラに砕け散った
おそらく麻奈が銃弾を銃口に弾き返したのだろう

麻奈「次は頭に返ってくるから、その玩具の弾」

茜はその場に崩れ落ちた
どうやらどうやっても勝てないことを自覚したのだろう

恭介「麻奈、茜を殺したら許さないからな」

麻奈「だってそこの小娘がいきなり撃ってきたんだもの、このくらいしないと黙らないわよきっと」

恭介「はぁ、茜大丈夫か？」

茜「あ、うん大丈夫…」

そう言って茜は立ち上がった

葉山「その人って本当に夜叉なんですか？」

麻奈「そうよ、でもそこら辺の雑魚と一緒にはしない方がいいわよ」

茜「何で恭兄の中にいるの…」

麻奈「気に入ったから」

茜&葉山「え！？」

麻奈「何に驚いた顔してんのよ、私が恭介を気に入ったから中に入って力を貸してあげてるただそれだけよ」

恭介「麻奈…そろそろ離れてくれると嬉しいんだが…」

麻奈「何で？」

そう麻奈は出てきてからずっと俺に抱きついている
茜に撃たれそうになったときも離れずに弾き返していたのだ
そして、胸が背にあたっていた

恭介「えっとだな…あたってるんだよ…さっきから…」

麻奈「何が？」

恭介「む、胸が…」

麻奈「だから？」

そう言って麻奈はワザとらしく胸をさらに押し付けた

恭介「麻奈…ワザとやってるだろ」

麻奈「マスターはこうゆうのが嫌いなのか？」

恭介「麻奈…俺の背中をよく見ろ」

麻奈は不思議そうな顔をして俺から離れて俺の背中を見た瞬間、その顔は驚いた顔になった

その原因はずっと俺の背中にしがみついていた遥である

そして俺にあたっていた胸は麻奈のではなく遥の発展途上なのか小さい胸だった

最初はあたってなかったが麻奈が抱きついたことによりあたっていた

麻奈「…マスターってロリ…」

恭介「違うからな、これは遥がしがみついて離れないからだ」

麻奈「でも、その子の胸があたって興奮したんでしょ？」

恭介「…」

反論出来なかった

実際に遥の胸があたっていたことに少し喜んでいたからだ

遥「く、苦しかったよ、お兄ちゃん」

麻奈「…マスターまさか本当に…」

恭介「違うからな、これは遥からいろいろ聞くのに都合がいいと思ったからだ」

麻奈「さっき暴走してた子よね」

恭介「そうだが…」

麻奈「…その子、多分無理矢理夜叉を体の中に入れられてるわ」

恭介「…それは本当か？」

麻奈「間違いないわ、でも変ね」

恭介「何が？」

麻奈「第三者によって無理矢理夜叉を体の中に入れると宿主の体と夜叉が互いに拒絶するのよ、けどこの子にはその様子がない」

恭介「多分それは遥の中に入れられる前に、遥と入れられた夜叉は仲が良かったんじゃないのか？」

麻奈「確かにそれなら拒絶はしないわね…でも」

恭介「力を使えば暴走するのか…」

麻奈「ええ、そうよ」

恭介「なんとなく見えてきたな、あの部屋で何が起こったのか」

茜「どうゆうこと？」

恭介「あの部屋で死んだ研究者たちが遥に夜叉を入れて、少し日を空けて力を使う実験をして、遥が暴走、そしてあの部屋にいた全員が殺された」

俺たちは少し沈黙していた

恭介「先に進むぞ」

そして俺たちは先に進みはじめた

第二十五話

俺たちは手当たり次第部屋に入り、調べて回っていたそしてほとんどの部屋に研究者たちの死体があった
顔が無い者、体が真っ二つに裂かれてる者、多種多様な死体があった
さらに実験が失敗していることを表す『失敗作（完全に夜叉化してる人間）』がいた部屋もあった
この状況からして生き残った研究者はいないだろうと思った
しばらく調べていると菊野たちがいたので、合流した

恭介「菊野…大丈夫だったか？」

菊野「俺はなんとか、けど女性二人が精神的にまいってる、背中に背負ってる子は誰だ？」

恭介「ここの唯一の生き残り、まだ子どもだったから連れてきた」

菊野「そうか…」

恭介「菊野…俺はここを爆破しおうと思う」

菊野「あぁ、俺もその方がいいと思う」

恭介「それじゃあ、茜付いてきてくれ、他はここから脱出しておいてくれ」

遥「…遥もお兄ちゃんと一緒に行く」

恭介「遥はみんなと一緒に先に行っててくれないか？」

遥「ヤダ！遥を一人にしたいで！」

俺を掴んでる手に力が入っていた

恭介「遥…全力で走るから振り落とされるなよ」

遥「わかった」

茜「じゃあ、行くよ恭兄」

恭介「それじゃあ、みんなはここから脱出しておいてくれよ」

美紅「うん…外で待ってるから」

菊野「ちゃんと出て来いよ」

葉山「お気を付けてください、まだ敵が残っているかもしれませんから」

佳山「三人ともちゃんと無事に出て来てよ」

そう言ってみんなは出口にむかった

そして俺たちは手当たり次第に部屋に入り爆弾を仕掛けて行った

さらに通路にも何ヵ所か爆弾を仕掛けた

恭介「これだけ仕掛ければ大丈夫だろう」

茜「うん、多分大丈夫だと思う」

恭介「じゃあ、俺たちも脱出するか」

茜「そうだね」

俺たちは出口にむかって走った

しかし出口までもう少しの所で『失敗作』に出会った

恭介「まだ居たか！」

茜「恭兄、どうする？」

むこうは一体、こっちの戦闘が可能なのは二人、しかし俺は遥を背負っているから接近戦は出来ない

恭介「今は戦闘は避けたいが…」

茜「あいつが通路を塞いでいるからむこうに行けないよね…」

恭介「仕方ない、麻奈出て来てくれ」

麻奈「なんじゃ？戦いか？」

恭介「麻奈単体で戦闘は可能か？」

麻奈「余り期待しない方がいいわよ」

恭介「なら俺と一体化してくれ」

麻奈「わかったわ」

俺に麻奈が入って来て徐々に一体化する感覚がした

茜「恭兄、その姿…」

恭介「茜、あいつを倒してから話してやる」

茜「うん」

俺は拳銃、茜はスナイパーライフルを取り出した
俺は拳銃に力を送り込んで敵にむかって撃った、それに続いて茜も撃った
俺は胸のあたり、茜は頭にむかって撃ったが、俺が撃った弾は腕にあたり、茜が撃った弾は避けられた
俺は続けて撃ちまくったがどれも急所を外した
そして茜は手榴弾を二、三個投げ込んだ
しかしまだあいつは立っていた

遥「お兄ちゃんあいつまだ立っているよ」

恭介「やっぱり、遠距離だとダメか」

茜「けど相当ダメージはあるんじゃない？」

確かにあいつの体のあちこちに弾があたっているが

恭介「いや、動きが全然鈍ってない、どれも急所は外している」

茜「ならどうするの恭兄？」

恭介「遥、少しだけ茜の近くにいてくれないか？」

遥「…うん」

遥は俺から降りて茜に抱きついた
それを見た俺は拳銃を捨てて、刀を取り出した

恭介「こっから、本気をだす、麻奈加減なんかするなよ」

麻奈「しないわよマスター」

俺は刀に力を送り込んで、一気に接近した
それに応戦するようにむこうも接近してきた
しかし力の差がありすぎた、最初に俺の攻撃を防いだ武器が壊れ、
そして俺が一気に斬り刻んだ

恭介「これだけやればいいだろう」

そして目の前に倒れている死体は塵のようになって消えた
俺は刀を捨てて、麻奈を体から出した

恭介「やっぱりこの感覚は好きにはなれん」麻奈「そのうち慣れるわよ…多分」

遥「お兄ちゃ～ん」

遥がいきなり背中に飛び付いてきた

恭介「遥、いきなり背中に飛び付くのはやめろ」

遥「だって、お兄ちゃんの背中は遥の特等席だもん」
恭介「…遥、まさか四六時中俺の背中にいるきか？」
遥「…ダメ？」
恭介「一日中はダメだ」
茜「そうよ遥ちゃん、恭兄にも色々あるんだから」
遥「わかった、遥我慢する」
恭介「それじゃあ出口に行くぞ」
茜「待って恭兄、さっきの姿は何？」
恭介「…俺と麻奈が一体化した姿」
茜「一体化って…」
恭介「茜、すまんがこれ以上は俺も話せない」
茜「わかった」
茜は残念そうにしていた
多分俺に何か悪影響があると思っているのだろう
恭介「心配するな茜、俺はここにいた奴等みたいにはならないから」
俺は茜に笑顔でそれだけ言っておいた

そして研究所から出た俺たちはみんながいることを確認して、研究所を爆破した

第二十五話（後書き）

新しく小説を書こうと思います
内容は魔法もので恋愛系（できればハーレムを目指します）です
投稿は近々するつもりなのでよかったらチェックしてください
もちろん「日常の中の非日常」も更新していきます

それではノシ

第二十六話

研究所を爆破してから翌日の朝、俺は非情に困っていた

遥「遥も連れてって」

恭介「遥は高校生じゃないから連れて行けないんだよ」

遥がなぜうちにいるのかというと、研究所を爆破した後、遥のことでうちの両親に相談したところ養子として引き取ることになったなので遥は如月遥から山本遥に名前が変わった

恭介「仕方ない、茜、先に行って先生に事情を話してくれないか？」

茜「…わかった、先に行ってるね」

俺は茜が出るのを見送っると遥の方を見て

恭介「遥、あまり駄々をこねると……怒るぞ」

遥「！！…ごめんなさいお兄ちゃん、我が儘言ってごめんなさい！！」

恭介「わかったならいいだ…さて今から行ってもな…」

今から学校に行ったとしてもＨＲ中に着くだろうか…

恭介「とにかく行くか、遥、ちゃんと留守番できたら何か買ってやるからな」

遥「うん、ちゃんとお留守番してるね」

俺は玄関を出ると急いで学校に行った

恭介「遅れてすいません」

先生「山本兄か、妹さんから事情は聞いてるからさっさと席に着きな」

俺は席に着いてクラスの奴らが騒いでいることに気付いた

健太「先生、恭介が遅れた理由は何ですか？」

先生「山本の家に親戚の子が来ていて、そいつがこっちの環境に慣れてなくて、一人でいるのが嫌で山本兄を離さなかったらしい」

健太「恭介、その親戚の子は男か女か？」

恭介「先生、ＨＲを続けてください」

健太「恭介、俺の話しを…」

先生「磯谷、黙って席に着け」

健太「すいません…けど先生、気になりませんか？」

先生「興味はあるが、今はＨＲ中だ、えーと、磯谷のせいで何話し

てたか忘れたぞ」

真依「先生、修学旅行のことについて話してたと思います」

先生「そうだったな、ありがとう神北、話しを戻すぞ」

この学校では二年生と三年生の時に修学旅行があり
二年生は夏に、三年生は秋にある
そして今回の修学旅行の話しをまとめると、山奥の旅館に三泊四日、泊まるらしい

先生「それじゃあ、詳しい内容はＬＨＲの時に話す、何か質問はあるか？」

恭介「先生、修学旅行に部外者を連れて来てはいけませんか？」

先生「親戚の子が心配か？」

恭介「えぇ、さすがに四日間一人で、なにも食べなかったら死にますから」

先生「校長先生に掛け合ってみる」

恭介「それなら、俺が掛け合ってみます」

先生「そうか、ならすぐに行け」

先生は廊下を指差して行くように指示してきた
俺はそれに従い校長室にむかった

俺は校長室の前まで来て

恭介「…ふぅ、俺あの人苦手なんだよな…」

俺は覚悟を決めてドアをノックした

???「誰〜?」

恭介「山本です、要件があって来ました」

???「恭介!?入って入って」

恭介「…失礼します」

俺は中に入り、ドアがしっかり閉まってるのを確認して

???「恭介〜!!」

横に跳んだ

するとさっきまでいた場所に小柄な少女がドアにおもいっきりぶつかっていた

???「アウ〜避けるなんて酷いよ〜」

恭介「いきなり飛び掛かって来る叔母さんが悪いんです」

目の前にいる小柄な人がこの学校の校長であり、俺の父親の妹で叔母の山本伊織(やまもといおり)さん、一見小学生に見えるが、本人曰く二十八歳らしい

若くして学校の校長になっているからそれなりに能力は高いのだが、

性格に難があるのと見た目が小学生なので未だに独身

伊織「叔母さん言うなー！私はまだ二十八歳なんだよ」

恭介「はぁ、わかりました、それよりお話しがあります」

伊織「何？愛の告白？」

恭介「違います」

伊織「なら何？」

恭介「お父さんから話しは聞いてますよね」

伊織「兄貴から？あぁ養子を迎い入れたことか」

恭介「修学旅行にそいつを連れて行きたいんですけど…」

伊織「う～ん」

恭介「そいつの分のお金なら俺が出すから」

伊織「じゃあ、恭介の部屋割りはこっちで勝手に決めるから、あとそれから貸し一つね」

恭介「ありがとう、叔母さん」

伊織「だから、叔母さん言うなー」

そして俺は教室に戻った

授業はとっくに始まってたが理由を言うとあっさり許してもらえた
その日は得に何事も無く、後ろの席の美紅が、暇だ暇だと騒いでいたぐらいだ
そしてＬＨＲの時間がやってきた

先生「それじゃあ、修学旅行の部屋割りを山本兄以外、男女別れて決めろ、ちゃんと三人から五人になるようにしろよ」

健太「先生、恭介は？」

先生「すでに山本兄の部屋割りは決まっているんだよ」

健太「誰が決めたのですか？」

先生「校長先生だ、ちなみに山本兄は特別参加の親戚の子とご同行なされる校長先生と同じ部屋だ」

恭介「…先生、冗談でもキツイです」

先生「冗談ではなく本当だ、よかったな山本兄」

恭介「全然よくありません、うちの親戚はともかく何でお…校長先生と同じ部屋ですか」

先生「校長先生と取引したんだろ」

恭介「そうゆうことかー！！」

俺はダッシュで校長室にむかった
そしてノックもせず、ドアを開けて中に入った

恭介「何で伊織さんまで修学旅行に来るんですか？」

伊織「いいじゃない、細かいことは」

恭介「全然細かくありません、得に部屋割り」

伊織「部屋割りはこっちで決めるって言ったはずだけど～」

恭介「…変な気起こさないでくださいよ」

伊織「私どれだけ信用ないの、大丈夫なにもしないから」

恭介「はぁ、失礼しました」

俺は重い足取りで教室に戻った

第二十六話（後書き）

新しく投稿する小説ですが、月曜日に出そうと思っています
内容は以前書いたと思いますが魔法ものです
あとバトル多めにしようと思っています

今まで読んで下さってる皆さん誠にありがとうございます

それではノシ

第二十七話

教室に戻るとクラスの男子全員から殺気に似た何かが発せられていた
殺気とゆうより欲望？願望？嫌悪？だろうか
とりあえず自分の席に戻って

恭介「今何を決めてるんだ？」

美紅「自由行動の班分け～」

恭介「あぁ～だから男子が殺気？を放ってるのか」

先生「班分けを決めが、男子は動くな！女子が一緒に行動したいヤツの所に行け、男女比は考えなくてけっこう」

ちなみにこのクラスは男子より女子の方が多い
先生が言い終わると女子はそれぞれ一緒に行動したい男子の所に行った
そして女子が来なかったヤツは他の男子の所に行ったなぜか泣きながら
ちなみに俺は先生が言い終わると同時に後ろから美紅が抱きつき、
それを見た茜が激怒しながら来て美紅を引き剥がした
そして遅れて真依と西条さんが来た

恭介「茜…もう少し手加減してくれ、首が折れるかと思った」

茜「ごめん恭兄、なかなか美紅ちゃんが離れなくて…」

美紅「茜ちゃん、意外と嫉妬深いよ」

真依「恭介、大丈夫か？」

西条「茜ちゃんは本当に山本君が好きなんですね」

茜「琴音ちゃん、違うからただ…恭兄が嫌そうだったから…」

恭介「俺は別に嫌ではないぞ」

美紅「なら」

恭介「体の小さい人から抱きつかれるのは慣れたから」

美紅「恭介君のアホー！」

美紅は俺をグーでおもいっきり殴った

そして後ろから首を締められた

恭介「ギブギブギブギブ、さすがに死ぬ」

茜「美紅ちゃん、恭兄から離れて～」

そこは離れてじゃなく手を放してだろと俺は思った

俺は結局先生が助けてくれるまで美紅に首を締められた

恭介「美紅…本気で俺を殺す気だったろ」

美紅「恭介君が悪いんだもん」

恭介「なぁ茜、体が小さいって気にするところか？」

茜「私は気にしてないけど」

恭介「だよな～」

俺は茜の頭に手を乗せ、撫でた

茜「きょ恭兄、恥ずかしいよ～」

恭介「ん？あ、すまん、つい撫でてた」

真依「ねぇ茜ちゃんが背が低いのを気にしない理由って…」

西条「おそらく山本君にしょっちゅう頭を撫でてもらってるからでしょうか…」

茜「わー、早く自由行動の内容を決めようー」

恭介「大声出して言わなくても聞こえるからな」

茜が慌ててパンフレット等を出した

茜「どこからまわる？」

恭介「ほとんど選択肢が無いような気がするけどな」

美紅「恭介君、そんなことないと思うよ」

恭介「山の中だしな、行けるのはせいぜい二ヶ所だな」

西条「ならここととここはどうです？」

恭介「俺は構わんが…みんなはどうだ？」

俺が茜たちに聞いてみると全員首を縦に振った

恭介「それなら決まりだな」

自由行動の内容が決まったからそれぞれ自分の席に戻って行った

第二十七話（後書き）

新しく小説を書き始めました
タイトルは
「オレとキミたちの魔法の時間」
内容は…読めば解ります
できれば読んでください

雑な告知でした、それではノシ

第二十八話（前書き）

遥の背丈は小学生ぐらいですよ

第二十八話

放課後、俺はすぐに家に帰ろうとしたが美紅に呼び止められた
そして、屋上まで来た

美紅「恭介君、約束覚えてる？」

恭介「約束？……研究所でしたやつか」

美紅「そうそれ…えっと、だから…今度の土曜日デートして！」

恭介「…しょうがないか…約束したしな…わかった今度の土曜だな」

俺が了承すると美紅は笑顔で

美紅「場所は後で連絡するから～」

走り去った
そして俺はどうやって茜と遥から逃げるか考えていた
下校中も考えていたが何も思い付かなかった

とうとう家についたので考えるのを止めたそして家に入ると遥が勢いよく飛び付いた

遥「お兄ちゃんお帰り～」

恭介「遥…ちゃんと留守番していか…？」

遥の頭がみぞおちに直撃したがなんとか耐えた

遥「うん、ちゃんとお留守番してたよ！」

恭介「そうか、偉いな」

俺は遥の頭を撫でた
すると遥は嬉しそうに目を細めた

恭介「遥、着替えて来るから離れてくれないか？」

遥「うん、わかった」

恭介「よし、いい子だ」

俺は遥の頭を軽く撫でて自分の部屋に行った
そして着替えてリビングに戻ると遥が背中に飛び付いた

恭介「遥…一応聞くけど何で背中に飛び付く？」

遥「ここが一番落ち着くから」

恭介「遥…悪いけどそれだと椅子に座れない」

遥「その時は前に移動する…」

試しに俺はソファーに座った
すると遥は俺が座る前に背中から前に移動した
そして立ち上がると再び背中に移動した

恭介「遥、何気に身体能力高いな…」

遥「そうかな？」

その時、玄関が開く音がしたので茜が帰ってきたのだろうと思い玄関にむかった

茜「恭兄ただい……」

恭介「お帰り、って何で固まってる？」

遥「お姉ちゃんお帰り」

茜は俺と遥を見るなり固まった

そして…

茜「遥ちゃん！恭兄から離れてー！」

茜が鬼の形相になった

それに俺は一瞬怯んだが、すぐに冷静になり

恭介「茜、子どもにムキになるなよ」

茜「ム、ムキになってないもん！」

遥「遥は子どもじゃないもん！」

恭介「そいえば聞いてなかったが、遥はいくつ？」

遥「今年で17歳だよ」

恭介&茜「え！？」

遥「だから遥はもうすぐ17歳になるんだよ」

恭介「遥…嘘じゃないよな…」

遥「嘘じゃないもん」

恭介「茜、話がある」

茜「奇遇だね恭兄、私も話があるんだ」

俺たちはリビングに移動して

恭介「どうする？」

茜「私は学校に行かせるべきだと思う」

恭介「それは叔母さんに相談するとして、後は遥の学力だ」

茜「授業で使う問題集なら有るけど」

恭介「それでいいか…、遥これ解るか？」

俺は茜から漢字の問題集を受け取り遥に見せた

遥「これが刹那(せつな)でこっちが吐露(とろ)で……」

茜「じゃあ、これ解る？」

茜は数学の問題集を取り出して遥に見せた
すると遥はすらすら解いていった

恭介「茜…俺が解けなかった問題を遥が簡単に解いたぞ…」

茜「恭兄の学力はクラスの真ん中ぐらいだったよね？」

恭介「遥、もしかして誰かに勉強を教えてもらってたか？」

遥「うん、いろんな人から教わったよ」

茜「多分、研究所の人たちが教えてたんだよ」

恭介「だろうな…」

♪～

俺の携帯が鳴り出した

恭介「はい、もしもし」

？？？「あ、もしもし恭介ちゃん？」

恭介「人違いです」

俺は反射的に電話を切ったするとすぐに再び鳴り出した

恭介「……」

？？？「いきなり切るとか駄目だよ、恭介ちゃん」

恭介「人違いです」

???「あれ～、兄貴にちゃんと聞いたんだけどな～しょうがないか、明日学校で恭介ちゃんが恥をかいてもいいか」

恭介「何をする気なんだよ！叔母さん」

伊織「叔母さん言うなー！、そんなに嫌いなの？私のこと？」

恭介「で、何の用ですか伊織さん？」

伊織「む～、明日学校に養子の子を連れて来てくれない？」

恭介「ちょうどよかったです、その事で話が有ります」

伊織「何かな？」

恭介「実は……」

俺は伊織さんに遥のことを話した

伊織「年齢と学力に問題が無いんでしょ？なら可能よ」

恭介「なら…」

伊織「手続きはこっちでしとくから、とりあえず明日その…遥ちゃん？を連れて来て」

恭介「わかった、ありがとう、伊織さん」

俺は電話を切り、明日遥を学校に連れて行くのを茜に伝えた

茜「遥ちゃん、明日学校に行く時に恭兄の背中に飛び乗るのは駄目だよ」

遥「えー、何で？」

茜「そうしないと、恭兄が不幸なことになるから」

遥「そうなの？」

恭介「あぁ、俺がいろんな意味で不幸になる」

遥をおんぶして学校に行くと美紅あたりが暴れそうで恐い、あと男子の奴らが発狂しそうだから…

遥「わかった」

俺は遥の頭を撫でた

ちなみに遥は俺の膝の上に座っている

茜「恭兄～」

何故か茜から殺気を感じた俺は茜の頭を撫でた

茜「ひゃ！ふにゅ～」

茜から殺気を感じたらとりあえず頭を撫でるか何か提案を出したらいいとゆうのはここだけの話

その後、俺たちは夕食を食べて町を見廻り（遥は留守番）してから、

寝ようとしたが

恭介「何で遥が俺の部屋で寝ようとしてる？」

遥「お兄ちゃんと一緒に寝たいから」

恭介「なら何で茜は枕を持って俺の部屋に来た」

茜「恭兄と一緒に寝たいから」

恭介「…まず、俺のベットはせいぜい二人までだ、そして年頃の男女が一緒に寝るのは色々とヤバイから駄目」

茜&遥「えー」

茜「前は一緒に寝てくれたよね？」

恭介「その時、茜の寝相のせいで寝不足になった」

茜「私そんなに寝相悪いの！？」

遥「お姉ちゃんと一緒に寝たことあるなら遥と一緒に寝てよ」

恭介「…茜、遥を自分の部屋に連れて行ってそのまま遥と寝てくれ」

茜「…わかった」

茜が遥を捕まえてそのまま部屋を出て行った

遥は色々叫んでいたが気にしないことにした

第二十九話（前書き）

投稿が遅れましたすいませんm（__）m

第二十九話

恭介「うっ…朝か…」

朝、俺は目が覚めた
目が覚めたはいいが何か違和感を感じる
まず、体が重い、そして右腕に圧迫感があり動かせない
俺は顔を上げてまず体を見た、すると遥が俺の上で寝ていた
そして右腕の方を見ると茜が右腕に抱きついて寝ていた
他人から見たら羨ましい光景だが俺にとって非常に危険な状態だ
と言っても遥はそんなに重くないからあんまり苦しくはないが、問題なのは右腕に抱きついている茜である
理由は茜が抱きついている右腕が徐々に絞まっている感覚がして、
そして右腕に力が入らない
つまり俺の右腕は現在進行形で茜によって壊れようとしている

恭介「茜、起きろ！」

俺は左手に茜の頭を叩いたしかし茜は起きない

恭介「茜、起きろ！朝だぞ！」

今度はチョップで茜の頭を叩いた

茜「…む～…おはよう～恭兄～」

抱きつかれていた右腕は解放された

恭介「遥、朝だぞ起きろ」

俺は遥の体を揺さぶった
しかし遥は起きなかった
ならばと俺が起き上がると俺の体の上にあった遥の両手が俺の背中にまわって抱きついた
本当に遥は寝ているのか疑問に思った
横を見ると茜が再び眠っていた

茜「恭兄～うふふ～これで恭兄は私の～」

一瞬寒気が走った
俺は茜を起こすためにベットから茜を落とした

恭介「遥、起きろ」

遥「すぅ～」

恭介「遥！起きろ！」

遥「んにゅ？ふぁ～おはよ～お兄ちゃん」

茜「…恭兄、おはよ～」

茜が立ち上がりながら言ってきた
頭を打ったのか茜は頭をおさえていた

茜「うぅ～恭兄、私をベットから落とした？」

恭介「揺すっても叩いても起きない茜が悪い」

茜「恭兄のいじわる～」

恭介「それより、茜と遥は何で俺の部屋で寝ていた？」

茜「…」

遥「お兄ちゃんと寝たかったから～」

恭介「茜…目を背けるな、遥…その目は反則だ」

遥は上目遣いで、なおかつ潤んだ瞳で俺を見ていた

これを見て何とも思わない男性がいたら病院に行くのを俺は勧める

恭介「まぁいい、茜、遥学校に行く準備をしろ、話は学校から帰ってからだ」

茜「…わかった」

遥「わかった」

茜と遥は部屋を出て行ったそして俺はすぐに制服に着替えた

朝食を食べて、早めに学校に行った

通学路は時間が早いからか人が少なかった

学校に着くと俺は茜に先に教室に行くよう言った

そして俺は遥を連れて校長室にむかった

校長室の前に着いたとき俺は遥に

恭介「遥、部屋の中に入ったら俺にすぐ掴まれ」

遥「？わかった」

遥は首を傾げていた

恭介「山本恭介です、用があって来ました」

伊織「どうぞ中に入って～」

俺と遥は中に入り、俺はドアがしっかり閉まっているのを確認して遥を抱えて横に跳んだ

伊織「恭介～」

すると伊織さんがさっきまでいた場所に突撃して、ドアに思いっきりぶつかっていた

伊織「いたた～…もー、避けなくてもいいじゃん」

恭介「伊織さんのタックルに当たると軽く重傷になるから、避けます」

実際に骨を折られたことがある

入学して日が浅い時に校長室に入ったら見事にタックルを食らいあばら骨を二本折られた

それ以来俺は校長室に入る度に避けている

伊織「で、その子が昨日言ってた子？」

恭介「そうです」

遥「は、はじめて遥です」

遥は緊張しているのかガチガチだった

伊織「はじめて遥ちゃん、私は恭介の父親の妹で、この学校の校長の伊織よ」

伊織さんは緊張している遥の頭を撫でながら言った

俺はその光景を見て、中学生が小学生の頭を撫でてる風にしか見えなかった

伊織「恭介、今私達を見て小学生が小学生を撫でてると思ったでしょ」

恭介「いえ、思ってません」

ニアミスとはいえバレたら即刻襲われるからすぐに否定した

伊織「ふぅん〜まっいいや」

恭介「それで…昨日言ったことは…」

伊織「あぁ、明日から普通に登校していいから」

遥「お兄ちゃん、どうゆうこと？」

恭介「遥も明日から学校に行けるんだ」

遥「本当！ありがとうお兄ちゃん」
遥は満面の笑みで俺に抱きついた
俺が遥の頭を撫でていると
伊織「それで、これから遥ちゃんはどうする？ここにいてもいいけど…」
伊織さんが遥に聞くと遥は俺を強く掴んだ
伊織「わかった、ちょっと待ってて」
伊織さんは机の上にある電話で俺のクラスの担任を呼び出した
するとすぐに先生が来た
伊織「今日、私の客がこの学校を君のクラスで見学させたいんだが、頼めるか？」
先生「もちろん、お任せください」
伊織「では頼んだぞ」
先生はすぐに校長室から出て行った
先生…かなり張り切ってたな～
それと真面目な伊織さんをはじめて見た気がする…
伊織「遥ちゃん、何かあったら私に言いなさい」
遥「うん、わかった」

恭介「じゃあ俺たちは教室に行きます」

伊織「また顔出しに来てね～」

俺たちは校長室を出て教室にむかった

教室に入ると一斉に悲鳴や怒号が飛び交った
もちろん遥を見た女子が可愛いと悲鳴をあげ、男子は俺に対する怒りを叫んでいた
俺が席に着くと遥は俺の膝の上に座った

先生「山本兄…その子が…」

恭介「校長先生の客です」

先生「そうか…」

遥「お兄ちゃん…あの人たち、恐い…」

遥は怯えながらクラスの男子を見て言った
そして遥が俺の事を『お兄ちゃん』と言ってさらにクラスの男子は俺に対して罵倒を浴びせた
女子は何かひそひそ話している、一部の女子から睨まれた気がした

恭介「遥、ああいう男たちは無視していいからな」

遥「わかった」

美紅「恭介君、その子誰～」
美紅はいかにも遥の事を知らないフリをした
恭介「俺の親戚の子だ」
俺は流す様に言った
健太「恭介！その可愛い小学生は誰なんだ！」
恭介「健太…小学生はここにいないぞ？」
健太「どう見てもその子小学生だろ！」
遥「お兄ちゃん…遥、この人嫌い…」
遥は健太を指差しながら言った
恭介「健太…さっそく嫌われたな」
健太「なんで！？」
恭介「人を見た目で判断するなと言うことだ」
健太「どうゆうことだ？」
恭介「そのうちわかるさ…」
健太は首を傾げながら自分の席に戻った
ＳＨＬ（ショートホームルーム）が始まるからだ

先生「ではＳＨＬを始めるが…連絡事項はみんなわかっていると思うが今日このクラスに客人が来ている…山本兄、紹介しろ」

恭介「遥…自己紹介だ」

遥「や、山本遥です」

遥は立ち上がりお辞儀をして言った

そして俺も立ち上がり

恭介「遥は俺の親戚の子で本当は明日からここに通うんだが本人の強い希望でここでの授業を見学することになった」

俺が言った事にクラスの奴等は騒ぎ出した

恭介「あと遥は俺らと同い年だ、決して飛び級じゃないからな」

俺は言い終わると席に座り遥も俺の膝の上に座った

クラスの騒ぎは一時収まらなかった

第三十話

遥が俺の膝の上に乗っているため、板書をノートに写すのは苦労したが、解答で悩んでたら遥が答えを俺のノートに書いた（勝手に）から、差し引きゼロである
けど、どの授業の時も必ず視線を感じた、あと殺気も…

恭介「美紅…さっきから殺気を感じるだが…」

美紅「恭介君、遥ちゃんが膝の上に乗っているのが、気に食わない人（主に男子）が居るんだよ、あと遥ちゃん、恭介君にベッタリだからじゃない？」

恭介「…なるほど」

とはいえ、遥は俺から離れないだろうし……諦めよ
俺は授業に集中することにした

休み時間は健太が必死で遥の機嫌をとろうとしていたが毎回

遥「あなたのこと嫌いです、話しかけないで、あと近づかないでください」

と遥はバッサリ切り捨てた
健太は茜より遥に嫌われている
まぁ健太の自業自得だけどな、口は災いの元とはまさにこのことだろう
ちなみに遥は移動教室でも俺から離れなかった
必ず俺の服の一部を掴んでいた

おかげて陰で色々言われている
一番多いのがロリコンだった…最悪だ

放課後は迷わず校長室に行った
教室は最早針のムシロである
校長室の前で再び遥に掴まるように言って、ノックして中に入った
そして俺はドアをしっかり閉めて横に跳んだ

伊織「恭介〜」

言うまでもないが、伊織さんが見事にドアに激突した

恭介「…伊織さん、毎回俺が入る度に飛び掛かって来ますけど、飽きないんですか？てか止めてください、そして諦めてください」

伊織「私は止めない、飽きない、諦めないがもっとうの人なのよ」

恭介「なら俺にも考えがあります」

伊織「どんな？」

恭介「教えません」

伊織「ムー、…それはそうと出来てるよ、遥ちゃんの制服」

恭介「なら遥、試着してみろ、俺は外に出てるから」

遥「うん、わかった」

俺は校長室から出た
数分後中から呼ばれ、再び校長室に入った
遥「お兄ちゃ～ん」
いきなり遥が飛び掛かって来た
俺はそのまま遥をキャッチして
恭介「どうした遥？」
遥「お姉さんが恭介は飛び付かれるのが好きって言ったから」
恭介「伊織さん、遥に変なこと吹き込まないでください」
伊織「なんで遥ちゃんは受け止めて私は避けるのかな～」
恭介「伊織さんの場合、された人間を死の淵に誘うからです」
伊織「遥ちゃん、恭介が私に冷たい」
遥「お姉さん、頑張って」
俺から見るとやはり中学生が小学生に慰められているように見える
恭介「あ、遥、制服似合ってるぞ」
遥「ありがとう、お兄ちゃん」
遥は笑顔で言った

伊織「…教材は家に送っといたから」

恭介「伊織さん、迷惑かけます」

伊織「なら恭介、少し慰めて…」

恭介「…わかりました」

俺は伊織さんを抱きしめて頭を撫でた

ちなみに前に伊織さんにこれ以外では？と聞いたら、笑いながらさらりと危ないことを言われた

伊織「ありがとう恭介」

恭介「毎回思いますけど、伊織さん、茜より要求が酷い（俺にとって）ですよね？」

伊織「そう？茜ちゃん、最近恭介と一緒に寝たらしけど……本当？」

恭介「…一緒に寝るわけないじゃないですか」

ヤバイ、どこからその情報を手に入れたんだ、てか伊織さんの顔が般若みたいでかなり怖い

伊織「そうならいいわ」

恭介「それじゃあ、遥着替えて、俺は外に出てるから」

遥「わかった」

俺は校長室から出た
数分後中から呼ばれた
そして中に入った
さすがに三度目は無かった

恭介「伊織さん、そろそろ俺らは帰ります」

伊織「わかった、気を付けて帰りなよ」

遥「バイバイ、お姉さん」

伊織「遥ちゃんも来たかったらいつでも来なよ」

俺と遥は部屋から出て、家に帰った

そして夜の夜叉探しは見事に空打った

第三十話（後書き）

評価とかいつの間にか高くなっていてびっくりしました
評価して下さった方々
本当にありがとうございます
これからも頑張って書きます

最近忙しいので更新スピードが落ちてしまいました
今のところ週一でやっています
余裕が出てきたら更新スピードを上げるつもりです

第三十一話

恭介「ア、アハハハ」

笑っていた、俺はただその状況にただ笑っていた
自分の手には血の付いた刀、そして足下は血の海になっていて、見知ったヤツらが倒れている
まだ息はあるようだ……

恭介「アハハハハハ…ア゛ァァァァァ」

なんだこれ?!この状況はなに?なんで血の付いた刀を俺は持っているんだ?

「た……助け…て」

倒れているヤツらのうちの一人が助けを求める声をあげていた
俺は手に持っている刀を両手で持ち、上に振りかぶりそして……

恭介「!?ハァハァ、ハァ〜、夢か?」

かなり現実味があったが本当に夢なのだろうか…

恭介「…寝間着が濡れて気もち悪いな」

汗が大量に出たのか寝間着は濡れていた

恭介「まだ暗いな」

窓の外を見るとまだ朝日は出ていなかった
俺は着ている寝間着を脱ぎ捨て、違う寝間着を取り出した
ガチャガチャ…バキッ！
ドアから何か壊れる音がした
バキッ、バキッ、バキッ
次々と何か壊れる音がするそしてドアがゆっくり開いた

遥「あれ？なんでお兄ちゃん起きてるの？」

遥が部屋に入ってきた
手には鉈が握られてた

恭介「…遥こそなんで起きているんだ、てかなんで鉈を持って俺の部屋に入ってきた？」

遥「ん～とね、お兄ちゃんとまた一緒に寝たくなってお兄ちゃんの部屋に入ろうとしたらドアがチョビットしか開かなくて鎖のようなものが見えたからそれを壊すためにこれを使ったの」

笑顔で凄まじいこと言う遥に少し頭痛を覚えた

恭介「遥…お前いくつだ？」

遥「えっと、胸は…」

恭介「サイズじゃなくて歳な」

遥「17歳だよ」

恭介「遥…普通はその歳になって誰かと、ましてや異性とは寝たいとは思わないんだぞ」

遥「お姉ちゃんは？」

恭介「あれは極めて珍しい例外だ、それよりその鉈どうした？家には無かったはずだぞ」

遥「前に護身用として幾つかおじさんたちから貰ったの」

恭介「幾つか？」

遥「えっとね……」

遥はポケットから何かの入れ物を取り出し、その中から鎌、拳銃、ナイフ、大鉈、サブマシンガンを取り出した…ってどうなってるんだその入れ物…

遥「あの場所にいた時に扱い方は練習してるから一応使えるよ」

研究員の皆さん物騒なもの持たせないで、てか凄いもの発明してたんだなあの研究所

遥「お兄ちゃん…脱ぐと凄いんだね、うっとりしちゃうよ」

忘れてた下ははいたが上を着るときに遥が入って来たんだった

恭介「遥、取り合えず自分の部屋で寝ろ」

遥「ヤダ、一緒に寝てくれないと朝お姉ちゃんが発狂するよ」

恭介「茜が発狂するわけないだろ、ほら自分の部屋に戻れ」

俺は遥を部屋から追い出した

遥「ムー、後悔するよお兄ちゃん…」

遥は一枚の写真を取り出した

遥「お姉ちゃんはこれに弱いからね～」

遥は写真を茜の部屋のドアの近くに置いた

遥「お姉ちゃんにもおっそわけ♪」

そして遥は自分の部屋に入った

俺は自分の父親から怒鳴られていた

けど何を言っているのかまったく分からなかった

俺の心は壊され、抜け殻のようになっていた

あのとき、もっとも信頼していた友人によって…

恭介「…またか」

続けて嫌な夢を見たな

俺は起き上がり、窓の外を見ると明るかった

恭介「朝か…」

???「…キャ……きょ……しん！！」

何だ？部屋の外で誰か騒いでいるが…

俺はドアを少し開けて隙間から様子を見た

茜「キャー、私でも見たこと無いのに何でこれがあるの？貰っていいよね、いいよね、よくなくても貰うー」

茜は部屋に入って行った

恭介「あ、茜が……おかしくなった…」

いったい何をみたんだ…

俺は一度ドアを閉め、考えた

状況を整理しよう

俺は起きて廊下で騒ぐ声を聞いた

気になって見ると茜が何かを見て興奮していた

茜はそのまま部屋に入った

恭介「つうこはつまり」

茜が部屋の前にあった何かを見ておかしくなった

恭介「茜がおかしくなるくらい欲しいもの…」

そんなのあったけ？

恭介「そういえば遥が夜中何か言ってたような気がする…」

遥に聞くのが一番早いか…

俺は遥の部屋に行った

遥の部屋は壁に制服がかかっていて、ただ布団が敷かれている

家具は休みの日に買いに行く予定で、その時についでに色々買うつもりだ

恭介「遥は…まだ寝てるし…」

規則正しい寝息で遥は眠っていた

恭介「遥起きろ朝だ」

取り合えず頬を軽く叩いてみた

しかし起きない

次に頬を引っ張ってみた

起きない

次の行動をしようとしたとき枕元に紙が置いてあるのに気づいた

恭介「え～と、『王子様がお姫様を起こす方法は？』」

俺は紙から目を離し、両手で遥の鼻と口を塞いだ

少しすると遥が暴れ出して起き上がった

遥「ハァハァ…お、お兄ちゃんひ、酷い～」

恭介「やっと起きたか、で遥、茜に何を見せた？」

遥「お姉ちゃんが喜ぶ物？」

恭介「何故疑問系なんだよ…」

遥「それよりもお兄ちゃん、何でこれを無視したの」

遥はさっき俺が見た紙を指差した

恭介「え？王子様はお姫様の鼻と口を塞いでお姫様を起こすんじゃなかったけ？」

遥「全然違うー、お兄ちゃん、お姫様はね王子様キスで目が覚めるんだよ」

恭介「…人工呼吸か」

遥「…もういいよ、お兄ちゃんはこの手の話は駄目なのがわかったから」

恭介「…それより遥、茜に何を見せた」

遥「お兄ちゃんには言えないもの」

恭介「…俺には言えないもので、茜が喜ぶもの…」

俺は遥の部屋を出て、茜の部屋に入った、ノックせずに

恭介「茜、朝から何騒いでいるんだ？」

茜「きょ、恭兄、い、いきなり入って来ないでよ」

茜は慌てて何か隠したふうに見えたが…

恭介「茜…今何を隠した？俺にバレたらマズイもの？」

茜「な、何も隠して無いから～」

恭介「ふ～ん、あ！茜の後ろにゴキブリ！」

茜「え！キャーー！」

茜はそのままの姿勢で後ろを向いて飛び上がった

そして俺は茜手に写真を持っているのに気づき、すぐに茜から取った

恭介「……」

写真を見た俺はただ沈黙したなかった

茜が持っていた写真には上半身裸の俺が写っていた

俺はおもむろに写真を破った

茜「あ…あぁ…」

茜が泣きそうな顔をしているがお構い無しに破った

恭介「茜…もうないよな…」

茜「…うん、それだけ」

茜はそうとうショックなのかかなり暗い顔だ

恭介「…写真は遥が撮ったのか？」

遥「そうだよ」

いつの間に撮ったんだよ…カメラ出してなかったよな、てか撮ってすぐに写真になるっておかしくないか？まさか、研究所で開発されたものか？そうだとしたらもっとましなもの作れよ

恭介「…一応聞くけど、どうやって撮った」

遥「お兄ちゃんには教えないよ」

恭介「だよな…」

これから遥に振り回されるような気がするのは何故だろう…

第三十二話

遥の正式な学校の登校初日は前日とあまり変わらなかった
遥の自己紹介が終わった瞬間にクラスの男子（俺を除く）は大声で叫んだ
席は茜の近くが空いていたためそこに決まった
近くの男子は大喜びで

「我が世の春が来たー」

と叫んでいた
他の男子も群がったが、近くにいる茜を含む女子が蹴散らした
俺と美紅はその光景を雑談しながら見守っていた
休み時間になれば遥は男子が群がる前に俺の所に来て、膝の上に無理矢理座って俺にしがみついた
よっぽど群がる男子が怖いのか手は震えていた
俺は落ち着かせるため、頭を優しく撫でた
まぁ、当然の如く男子から殺気を帯びた視線を感じていた
そして、何故か美紅からも殺気を感じた、あと男子に紛れて別の殺気も感じた
授業が始まる直前になれば遥を無理矢理自分の席に戻した
そして、授業中に夜叉の気配を感じた俺は先生に保健室に行くと告げて保健室にむかった

恭介「遥…なんで付いて来た？」

遥「お兄ちゃん以外の男の人が怖いから…」

そりゃあんだけ群がったら怖くなるよな…

恭介「なら、絶対ここから出るなよ」

遥「…わかった」

俺はいつものように自分のマスクが置いてある場所を探すと…

恭介「…なんだこりゃ」

マスクではなくもはやお面である
しかも、ひょっとこである

恭介「これを着けるくらいなら…」

俺はお面を投げ捨てて、先生のものと思われるフード付きのパーカーを借りてフードを深く被った
夏にこれはさすがに暑いがしかない
一抹の不安があるが俺はグランドに出た

グランドには人型の夜叉が五体いた
俺は右手で刀、左手で拳銃を取り出し、そして一番前に出ているヤツを拳銃で撃った
弾は人でいうなら頭、顔、胸の三ヵ所に当たり、撃たれた夜叉は倒れた
残った弾を他の夜叉に撃って、空になった拳銃を捨て、刀を両手持ちにして夜叉に接近した
俺はまず、一体の首を切断し、そのままの勢いで別の夜叉の胴体を切断、他の夜叉が攻撃してきたが、横にステップして回避、残り二体の距離が近かったから、一閃して二体まとめて斬った

恭介「…手応えがなかったな」

いつもなら二、三ヵ所に傷を作るはずなのに、今回は無傷ですんだ

恭介「考えるのはよそう」

俺はグランドから保健室に戻った

恭介「遥、大人しく…」

美紅「よ～し、次は負けないからな」

遥「次も勝ちます」

恭介「お前ら保健室でなにやってんだー！」

美紅と遥は麻雀をやっていた、しかも雀卓で…

美紅＆遥「麻雀だけど（だよ）」

恭介「そんなの見ればわかる…だいたい何で保健室に雀卓と牌があるんだよ…」

美紅「先生の私物だと思うよ、これそこの机の近くにあったし」

美紅は言いながら二つある机のうちの一つを指差した

恭介「これ…本当に教員の机か？」

机の上には携帯ゲーム機とソフトが散乱していた
引き出しの中を調べるとボードゲームなどがあった

恭介「何度も来てるのに、これは気づかなかった…」

とは言うものの実際、俺はここですることは、マスクを被るか負傷して応急措置をする、あとは気絶して運ばれるしかない

遥「お兄ちゃんもやろうよ」

遥は牌を列べながら言ってきた

恭介「東風戦をやったら、教室に戻るぞ」

遥「わかった」

美紅「いいよ」

雀卓に座り麻雀を始めた

第三十二話（後書き）

久しぶりにこっちを更新しました
最近は別作の投稿しかやってなかったから、いざ書こうとするといろいろ忘れていました（―――；）
しかも内容が薄い気がすると思ってしまう

そんなこんなで、次は美紅とのデートまでもっていけたらいいな～と思ってます

それでは次回までノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4362w/

日常の中の非日常

2011年12月17日10時49分発行